研究報告書

教科専門と教科教育を融合した音楽領域専攻のカリキュラム開発

—— 初年次教育に焦点をあてて ——

2021 年 3 月

京都教育大学音楽科

目　次

はじめに **1**

Ⅰ．本研究について **2**

1．研究目的 2

2．問題意識と研究方略 3

3．研究計画 4

4．学内のプロジェクト経費獲得とその使途 6

Ⅱ．音楽領域 1 回生必修科目の内容と取り組み **8**

1．初年次基礎科目 8

1）KYOKYO スタートアップセミナー（音楽領域） 8

2）専攻基礎セミナー（音楽）の内容 13

2．演奏実技科目 20

1）器楽基礎演習 20

2）声楽基礎演習 21

3．作曲・音楽理論科目 26

1）ソルフェージュ 26

2）作曲・編曲法基礎演習 30

4．実地教育科目 36

Ⅲ．4 年間を見通した音楽領域専攻カリキュラムの開発にむけて **37**

1．教員へのヒアリング調査 37

1）学生の資質・能力に関わる事項 37

2）カリキュラム改善に関わる事項 39

2．到達目標一覧とカリキュラムマップの試作 41

Ⅳ．成果と今後の課題 **43**

1．初年次教育の成果と課題 43

1）成果 43

2）課題 44

2．今後の研究計画 44

おわりに **46**

巻末資料：【拡大版】音楽科カリキュラム・マップ（2020 年度暫定版） **47**

凡例

ⅰ．図、表、写真のそれぞれに通し番号を付した。
ⅱ．参考文献は各章末に示した。
ⅲ.「はじめに」と「おわりに」を除く箇所については、節または項ごとに担当執筆者を文責者として明記した。

はじめに

清村百合子

戦後の教員養成教育の流れのなかで、とりわけ近年、大きな改革の波が押し寄せている。その最たるものとして、第一に国立の教員養成大学大学院修士課程の教職大学院への改組の動き、第二に 2017 年の教員免許法改正における教科専門と教科の指導法の「大括り化」が挙げられる。

第一の教職大学院への改組が意味するものとして、従来の修士課程における各教科の専門性に特化した学問重視のものから教職重視へと転換されたことが挙げられる。つまり教職大学院化に伴って、学部教育も含めたこれからの教員養成大学では、文学部や理学部を志向したものではなく、教員養成大学の独自性を発揮していくべく、学校の教科との関連性を担保したカリキュラムや授業内容を見直すことが求められているといえよう。

第二の 2017 年の教員免許法改正における教科専門と教科の指導法の「大括り化」は、教員養成大学における教科専門と教科教育の関係を根底から見直す契機となっているといえよう。従来、免許法上「教科に関する科目」と指導法を含めた「教職に関する科目」は区分されていた。ところが、新免許法では「教科に関する科目」と「教科の指導法に関する科目」が一緒になり「教科及び教科の指導法に関する科目」という「大括り化」がなされたのである。この科目の大括り化は何を意味するのか。それは、教科の内容と指導法を併せて指導できる授業の開設が可能になったということを意味する。これまで「教科専門」と「教科教育」はそれぞれ独立して存在し、教科専門を担当する教員は自身の専門分野の範疇で教科の「内容」を受け持ち、教科教育を担当する教員は教科内容との関連を意識することなく、「方法」を受け持ってきた。しかしながら、この「大括り化」によって、子どもの教育という教育実践の観点から教科内容をとらえなおし、「内容」と「方法」を統合した形でカリキュラムや授業を再構築することが今後求められるだろう。

上記のような教員養成教育の改革の渦中において、本プロジェクトは教員養成大学の学部学生を対象として高い教育実践力を育成することを目指し、教科専門と教科教育を融合したカリキュラムを開発することを目的としている。それは、教科専門と教科教育との関連を見据えたこれからの教員養成教育の在り方そのものに示唆を与えるものとなるだろう。これまでもカリキュラム上では教科専門と教科教育の科目はそれぞれ設定されていたものの、両者の関連づけは学生の偶発に任され、意識的に関連づける機会は保障されてこなかったといえる。しかし子どもの教育という観点からみれば、教科内容と教育方法を区別することに全く意味はなく、むしろ「何を／どのように教えるか」という両者を関連づけることで、はじめて教育実践の探究は可能となる。それを学生の自発的学びに委ねるのではなく、意図的なカリキュラムとして再構築することで、「内容」と「方法」とを統合した形で教育実践についての学びを深めることが期待できる。

本プロジェクトには教科専門５名、教科教育２名の音楽科教員が関わっている。教科専門の教員は専門分野に特化した知識や技能の習得について、教科教育の教員は教育方法について、それぞれの専門分野に立脚した上で、両者のどこをどう関連づけることが可能なのか、実証的研究を通して解明していくことが本プロジェクトの課題となる。プロジェクト研究を通した教科専門と教科教育の統合により、教員養成大学におけるカリキュラムモデルが築かれることを期待する。

Ⅰ．本研究について

１．研究目的

本プロジェクト研究では、京都教育大学音楽領域の学生を対象とし、学部４年間で、「初等教育において音楽科運営の中心となる教員」及び「高い教育実践力を身につけた中等音楽科教員」を育成すべく、そのような教員に必要な資質・能力を身につけさせるための教科専門と教科教育を融合したカリキュラムを開発することをめざす。

教員養成系大学（学部）においては、従来から教科専門の授業内容をどのように教員養成カリキュラムとして活かしていくのか、という問題が議論されてきた[1]。またそれらの教科教育との融合も課題とされ、様々な議論がなされてきた[2]。

音楽科教員養成においても長年にわたり同様の課題があった。本学音楽科には現在、教科専門の教員が５名（器楽２、声楽１、作曲１、音楽学１）と教科教育の教員２名（音楽科教育実践学１、音楽教育史学１）が専任教員として在籍している。近隣の教員養成系大学を見回しても、全学年で約 60 名という学科の学生数に対してこれだけの人数と幅広い専門性を揃えた教員を配置している大学は本学くらいのものである。これまでも本学科ではこの特長を生かして「初等教育において音楽科運営の中心となる教員」もしくは「高い教育実践力を身につけた中等音楽科教員」を養成するべく、各教員が各自の専門性に基づく授業を行ってきた。しかし、それぞれの教育内容を、学生自身の具体的な実践力、より具体的には授業構成力として統合することは、学生個人の資質や偶発的な経験に任せてきたのが実情である。この７名の教員の全員が参加して、相互の授業内容を共有し、音楽科授業の実践に必要な知識・技能を経験的かつ系統的に学ぶ「授業のネットワーク」を構築すれば、「初等教育において音楽科運営の中心となる教員」や「高い教育実践力を身につけた中等音楽科教員」として必要な資質能力を身につけさせる機会を保障することにつながると考えられる。

そこで本研究では、従来の授業を見直し、教科専門と教科教育それぞれの教員の専門性が有機的に関連するカリキュラムを開発することを目的とした。

（文責　樫下達也）

---

[1] とくにこの問題は小学校教員養成の課題として長年論じられてきた。70 年代以降の教員養成をめぐる対立軸として存在する「開放制」か「閉鎖制」かという議論（海後 1971 とこれに対する反論である横須賀 1973 など）のなかで「教科専門」が教員養成との間に矛盾を抱えるという問題が鮮明に現れたことが指摘されている（船寄 2014、p. 566）。また例えば横須賀（2006）は教員養成カリキュラムの枠組みとして「一般（教養）教育」「教科専門」「教職専門」の３分類を統合する軸の必要性を訴え、そのような軸の名称として「教授学」を提示した。

[2] 西園ほか（2009）など

２．問題意識と研究方略

京都教育大学では 2019 年度入学生から新カリキュラムに移行した。そこで本研究は、同年度入学生に着目し、この学生たちが卒業する 2022 年度までの４年間にわたり実施する。本報告書はその２年目までの内容の報告を、とくに 1 年目、すなわち初年次教育に焦点を当てまとめたものであり中間報告的な意味合いをもつものである。

さて具体的に研究を進めるにあたって重点となる問題意識と、それを克服するための方略は次の三つである。一つ目の問題意識は、すでに述べた教科専門と教科教育の教員養成カリキュラム上の連携の不足である。これに対する方略は当然のことながら、教員間の情報共有とこれによる授業間の連携が取れた有機的カリキュラムを開発する、という本研究の主たる目的そのものであろう。具体的には、相互の授業内容について、聞き取り調査を通して共有し、重複している内容や、自身の授業内容の前提として他の授業で取り扱うことを希望する内容を出し合う。このためにプロジェクト研究のための会議を定期的にもつこととし、その結果を統合しながら教科専門と教科教育の専門性が連携されたカリキュラムマップを作成する。

二つ目の問題意識は、近年の大学教育における初年次教育重視の傾向への対応である。2000 年代以降、大学における初年次教育が注目され始め、今年はその傾向がますます強まっている[3]。本学においても、2019 年度から開始された新カリキュラムでは全学的に初年次教育が一層重視され、１回生前期の必修科目「KYOKYO スタートアップセミナー」では大学の学びの基礎となる全学プログラムと並行してレポートの書き方やプレゼンテーションの演習などを行い、後期の「専攻基礎セミナー」では各専攻の基礎的な内容を学ぶ授業を各学科が工夫して行うことになった。本学科ではこの改革に注目し、全教員が後期の「専攻基礎セミナー」にオムニバスで参加、各自の専門の基礎的な内容を扱うこととした。これによって、学生は４年間をかけて音楽科において学ぶ内容の全体像を把握し、教科の内容の専門性を深めて実践していく学びの視点と、それを教育や具体的な授業と結びつけて考えていく教科教育の視点の両方を初年次から得ることができるのである。また同時に、教員も、この「専攻基礎セミナー」における相互の授業内容を話し合うなかで相互の専門性の結びつきを意識し、２回生以降に学生が履修する担当授業の内容が、音楽科教員養成のカリキュラムのなかでどのような意味をもつのかを考える契機となるだろう。

三つ目の問題意識は ICT を活用した授業への対応である。音楽科は視聴覚機器を用いることで大きな教育的効果が得られる教科であり、視聴覚資料を用いた授業構成は不可欠である。本報告をまとめてい

[3] 例えば論文検索システム CiNii で「初年次教育／大学」で日本国内の論文を検索すると、最も古い論文が公表された 2003 年は４件である。その後、2004 年（11 件）、2005 年（35 件）と年々その数を増やし、2010 年の 127 件で３桁台に乗ったあと、2013 年（156 件）、2014 年（124 件）、2015 年（157 件）の３年間でピークを迎える。その後は 100～120 件の間を行き来し、2019 年は 130 件の論文が発表されている。このことからも、2000 年代に大学における初年次教育への注目が始まり、2015 年以降はこのテーマによる論文が毎年一定の数量ずつ蓄積されていることがわかる。

る 2020 年 11 月の時点では、新型コロナウィルスの感染拡大の影響によって、ICT 活用の技術を身につけた教員の養成はますます求められるようになっている。ところが音楽科における授業を見てみれば、教員がプロジェクターでスライドやインターネット上の動画を投影したり、CD プレイヤーを活用したりするくらいで、それ以上に視聴覚機器類が活用される場面はない。例えば本学の附属桃山小学校のように、ICT 活用の先進的な取り組みを行っている教育現場に比すれば多大な遅れをとっているのが現状である。こうしたことから、本プロジェクトでは、教科専門と教科教育の内容を融合する手段として ICT 機器を活用した授業の開発を行う。具体的には、学習教材としての音源、動画、画像、及び学生の学習成果を学生のタブレット端末に蓄積し、学生と各教員がいつでも参照・共有できるようにすることで、教科専門と教科教育の学びの連続性を保障する。これにより各授業が有機的に結びついたカリキュラムを構築することをめざすと同時に、学生には ICT を活用した授業構成の力を身につけさせる。

以上のように、本研究では、初年次教育のより一層の充実を基盤としながら、ICT を活用することで各教員の授業間の連携を深め、教科専門と教科教育が有機的に関わり合うカリキュラムを作成することをめざす。

（文責　樫下達也）

３．研究計画

本研究は次に示す４年間の研究計画により遂行する。

【第１年次】(2019 年度)

第１年次ではまず、本学科の初年次教育に当たる、「KYOKYO スタートアップセミナー」および「専攻基礎セミナー」で学生の総合的な能力の伸長をはかる。「KYOKYO スタートアップセミナー」では、全学プログラムのプレゼンテーション技能の授業の成果発表を「演奏付プレゼン」として実施する。音楽を発表テーマの中心に据え、演奏動画や楽譜を映し出すなど視聴覚機器とタブレット端末を組み合わせた効果的なプレゼンテーションに取り組む。これによって音楽に関する専門的知識を身につけながら、同時に音楽についてわかりやすく解説する能力を身につけさせる。「専攻基礎セミナー」では、学科の全教員がオムニバスでそれぞれの専門の基礎について概説すると同時に、教育用楽器を用いた音楽教育メソッドの体験や、タブレット端末を用いたテーマ学習・発表など、実技や演習を行う。これにより、教科専門と教科教育の学習に共通して必要となる、音楽と音楽教育の知識・技能の基礎を、経験的に幅広く身につけさせる。

また、音楽科専門科目の初年次教育の授業においては次のような基礎的能力の習得を目指す。「声楽基礎演習」では、声楽の基本である発声や、その為の身体の仕組みを、視聴覚メディア等を活用して学び、身体と心を解放させながら歌う技術を身に着ける。音楽表現を理論と実践を通して学び、学校教育現場で模範となる声楽の基礎を身につける。「器楽基礎演習」では、小学校や中学校の音楽科授業で取り扱われる教育用楽器についての基礎知識と奏法を学ぶ。ピアノの移動方法や楽器の取り扱いなど、教育現場

で想定される内容を実践的に学習するとともに、様々な楽器の基礎的（模範的）な演奏技術を身につける。「ソルフェージュ」では、聴覚と視覚を関連づけながら表現するための基礎力を身につける。音楽を聴いて楽譜を書く能力、楽譜に記された情報を読み解き演奏する能力を相互的に体験することによって、楽譜というメディアの特性と表現の可能性を考察する。タブレット端末など視聴覚メディアを活用しさまざまな楽器の音色を教材として取り扱う。「作曲・編曲法基礎演習」では、初等、中等教育で実施される「音楽づくり」「創作」を念頭においたカリキュラムを実施し、教育現場で求められる作曲、編曲の基礎的な能力を身につける。ICT 機器の活用によりそれぞれの創作データを共有し、意見交換を行う。

さらに、各教員の授業内容についての聞き取り調査を行い、専門性を有機的に関連させた大学４年間の暫定的な授業カリキュラムマップを作成する。

【第２年次】（2020 年度）

まず、前年度の反省を踏まえて、初年次教育の授業の改善を行う。とくに、各教員が関係する「専攻基礎セミナー」（１回生履修）の授業計画の見直しと改善を行う。

また、教科専門の授業の改善を行う。例えば、必修授業「日本音楽・民族音楽概論」、選択授業（「合唱Ⅰ～Ⅳ」など）において、新学習指導要領に対応した教科書を参考とした授業を展開し、学生が専門的見地から教材研究を深める能力を身につけさせる。

さらに、教科教育の授業の改善に取り組む。「中等音楽科教育Ⅰ」（２回生履修）では小中接続を視野に入れながら、教科専門における教材研究を生かした授業デザインを実施する。「中等音楽科教育Ⅱ」～「中等音楽科教育Ⅳ」（３回生履修）についても、３年次目を見据え、ICT を活用した授業をさらに進め、ここでの課題を来年度の研究に活かす。

一方、３年次目を見据えて教育実習との関係も考慮しながら１年次作成のカリキュラムマップを見直す。各教員の専門性を有機的に関連させた大学４年間の暫定的な授業カリキュラムマップの改訂版を作成する。

【第３年次】（2021 年度）

３年次は、中学校学習指導要領の全面実施となるため、これを中心課題とし、とくに「中等音楽科教育Ⅱ～Ⅳ」の授業内容と教科専門の内容の関連に焦点化しながら２年次作成のカリキュラムマップを更新する。

【第４年次】（2022 年度）

１～３年次までの学びが卒業論文指導にどのように活かしうるかを主なテーマとし、同時に「教職実践演習」の授業で学生自身に本プロジェクトで作成したカリキュラムを評価させ、研究全体の成果と課題をまとめる。

（文責　樫下達也）

４．学内のプロジェクト経費獲得とその使途

本研究は京都教育大学「平成 31 年度 教育研究改革・改善プロジェクト経費」として 626,000 円の経費を獲得し実施したものである。経費は学生の実証的な学びを保証することを目的に、物品費 522,873 円、謝金 102,600 円として支出した。

物品費のおもな支出は ICT 機器である。音楽科では１学年で一人一台使用できるよう iPad14 台を順次購入予定であり、うち 11 台と周辺機器を本プロジェクト経費より購入した。これらの機器はおもに「器楽基礎演習」「中等音楽科教育」で活用した。「器楽基礎演習」では様々な楽器を疑似的に体験できる音楽アプリを体験し、「中等音楽科教育」では教科専門と教科教育を融合する手段として「将来現場でも活用できるような動画教材の作成」に使用した。学内プロジェクトのほかに、音楽科は 2019 年度青山音楽財団による「第８回学校等支援事業」の認定を受け、オルフ楽器一式を購入した。購入にあたっての自己資金を本プロジェクトより支出し、鍵盤系楽器はもとより、国内では製造されていないティンパニ３台を揃えることができた。この楽器一式は、初年次では「作曲・編曲法基礎演習」等で使用しているほか、2019 年度はオープンキャンパスでの音楽科授業体験でも使用した。その他の備品として「器楽基礎演習」等で用いる折畳式譜面台、楽器庫整理のための収納用具等を購入した。



写真１．オープンキャンパスでのオルフ楽器の体験のようす

次に謝金の支出について述べる。本プロジェクトでは「オルフ教育」と「プラスティック・アニメ」の実施のため３名の外部講師を招聘した。「オルフ教育」では、カール・オルフの音楽教育の理念に基づい

たワークショップや講演をヨーロッパや日本各地で開催されてきた、ディートマー・エダー氏と誉田真理氏を招き、音楽ワークショップを実施した（2019 年 8 月 1 日）。このワークショップでは音楽科教員および学生の約 40 名が参加し、言葉と動き、音楽を関連させたプログラムを体験した。あわせて、ワークショップ前日には本学所蔵の壊れたオルフ楽器を修復するための具体的な方法について、同講師より知識提供があった。




写真２．オルフ教育についての音楽ワークショップ

専攻基礎セミナーでは「プラスティック・アニメ」を実施するため、舞踊家で振付家のきたまり氏を招いた。「プラスティック・アニメ」とは、音楽と身体を関連づけるプログラムの名称である。氏はマーラーの交響曲を用いて舞踊作品を制作、実演する企画を継続中であることから依頼した。専攻基礎セミナーではドヴォルザーク《交響曲第９番》第３楽章を課題曲として設定した。履修者は音楽の構造を端緒とし、グループごとに各区分を分担し振付を考え、実演することを目標とした。複数回のレッスンでは身体で表現することの基本的なトレーニングから、振付についての指導をいただき、成果発表会にて実演した。

（文責　増田真結）

【本章の参考文献】

海後宗臣（1971）「終章　総括と提言」『教員養成（戦後日本の教育改革，第 8 巻』東京大学出版会。
横須賀薫（1973）「教員養成教育の教育課程について：「提言」を斬る」『教育学研究』 第 40 巻第２号。
横須賀薫（2006）『教員養成 ： これまでこれから』ジーアス教育新社。
西園芳信、増井三夫編著（2009）『教育実践から捉える教員養成のための教科内容学研究』風間書房。
船寄俊雄編著（2014）『教員養成・教師（論集現代日本の教育史２）』日本図書センター。

Ⅱ．音楽領域１回生必修科目の内容と取り組み

１．初年次基礎科目

１）KYOKYO スタートアップセミナー（音楽領域）

（１）2019 年度授業のねらい

本授業は 2019 年度から開始された全学共通授業であり、基本的には各学科単位で１回生を対象として前期に授業が行われる。

まずは全学科に共通したシラバスの「授業の概要」および「授業の到達目標」を確認する。

「授業の概要」

高大接続の観点から、高等学校から大学の学びへと円滑な移行を図るため、次に示す内容などを身につけ高めることをめざします。①情報モラル、②メンタルヘルスなど健康保持、③卒業後の職業・進路選択（教職への動機づけ）、④国際理解（留学）、⑤人権（性教育）、⑥学内の教育資源の活用、⑦レポートの書き方など文章表現の技法、プレゼンテーションなど口頭発表の技法。また、専攻専門科目を履修していく上で必要な基礎的スキルを身につけるため、所属専攻に関連する学問分野の入門的な内容を扱います。

「授業の到達目標」

大学での学びのナビゲーションとしてだけではなく、自ら課題を発見し解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の汎用的能力、多様な人々と協働しつつ新たな課題に向かう経験、本学の入口から出口までをつなぐキャリア支援などについて、初年次段階で必要な知識を身につける。

授業全体のねらいはここにあることが全てであり、あえてやや大雑把に要約するならば「大学における学びの基礎を身につけること」である。このなかで音楽科としてとくに力を入れたのは「授業の概要」の「⑦レポートの書き方など文章表現の技法、プレゼンテーションなど口頭発表の技法」である。

音楽領域の学生は音楽演奏の実技に対しては得意と感じている一方、まとまった文章を書いたり、自分自身の考えを論理的に他者に伝えたりする力には自信をもっていない傾向が見られる。実際のところ、従来、音楽領域の学生は卒業論文の執筆はもちろん、レポート執筆についても、その書かれたものを見る限り決して十分な能力をもっているとは言えない、というのが学科教員の共通理解であった。しかし、教員として現場で活躍することになる学生たちが、自信をもって文章を書くことができるようにすることは、教育大学における教員の責務であることは間違いなく、この問題は長年の課題でもあった。そこでこの授業を、大学入学当初から文章の書き方を学ぶための絶好の機会ととらえ、音楽や音楽教育について

実技以外の側面から学びを深めることの面白さに気付きながら、無理なくレポート執筆やプレゼンテーションの方法を学ぶことができるよう内容を工夫することとした。

（２）2019 年度授業報告

2019 年度は表１のように授業を展開した。KYOKYO スタートアップセミナーは全学共通プログラムと学科実施プログラムが混合しており、学科実施プログラムもある程度のテーマ設定がなされている。すなわち「大学生活とメンタルヘルス」「教師への道」など表１のプログラム名において「(全)」がついている授業は全学共通プログラムで担当講師は大学が割り振ることになっている。これに対して、「研究と著作権」「文章表現の基礎」「レポート作成入門」「プレゼンの仕方」などの授業は、大まかな内容と授業構築のために参考とする共通教材が大学によって示され、これを用いて各学科の教員が授業を構想し、実施するのである。ここでは後者の学科教員が担当した授業に焦点を当て、とくに「レポート作成入門」と「プレゼンの仕方」の授業について報告する。

表１．2019 年度 KYOKYO スタートアップセミナー授業一覧

実施日	回	全学プログラム	集合場所	備考
4 月 15 日	第１回	オリエンテーション 情報モラル入門	音楽演奏室	
4 月 22 日	第２回	大学生活とメンタルヘルス（全）	Ｆ26 講義室	
5 月 10 日	第３回	教育資料館ツアー（全・選択）	教育資料館	
5 月 13 日	第４回	教師への道（全）	Ｆ26 講義室	
5 月 20 日	第５回	図書館ツアー（全）	附属図書館	
5 月 27 日	第６回	音楽科資料室について	音楽演奏室	レポートとプレゼンのための資料収集
6 月 3 日	第７回	性教育・性暴力（全）	Ｆ26 講義室	
6 月 10 日	第８回	グローバリゼーションと教育(全)	Ｆ26 講義室	
6 月 17 日	第９回	研究と著作権	音楽演奏室	レポート素案の交流
6 月 24 日	第 10 回	文章表現の基礎	音楽演奏室	
7 月 1 日	第 11 回	レポート作成入門	音楽演奏室	レポート課題
7 月 8 日	第 12 回	プレゼンの仕方	音楽演奏室	レポート添削
7 月 18 日	第 13 回	プレゼンの練習①	音楽演奏室	
7 月 22 日	第 14 回	プレゼンの練習②	音楽演奏室	
7 月 24 日	演奏付きプレゼンテーション本番		音楽演奏室	
7 月 29 日	第 15 回	まとめと振り返り	音楽演奏室	レポート完成版提出

①「レポート作成入門」

大学が示した文章の書き方講座、レポート作成入門、プレゼンの仕方のそれぞれの授業は、授業ごとに異なるテーマで学生が課題に取り組むことが想定されていた。しかし、音楽領域専攻生の平均的な文章力を鑑みた場合、一つ一つのテーマに対してかなりの時間を割いて添削することが必要となることが予想された。そこで、これら全ての授業を通して、学生は自身の興味のある一つのテーマについて調査し、それをレポートにまとめる過程で文章表現、レポートの形式、プレゼンテーションの方法の全てを学ぶようにした。

はじめに、音楽もしくは音楽教育に関わることのうち、興味のあることについて文献を使って調べ、その内容をまとめる、というレポート課題を課した。その後は授業ごとに受講生が書いてきたものを題材としながら、レポートにふさわしい文体、基本的な構成、引用の明記、参考文献の提示などについて個別に複数回に渡る添削を行なった。具体的には、受講生はこれまで「です・ます」調の文体を中心に作文指導を受けてきているため、論文やレポートのために「である」調の文を書く練習を行なった。また自身の考えを述べるときには一人称の主語を使わず「〜と考えられる」といった受け身の表現にすることなど、一つ一つ例を示しながら解説した。

全学共通プログラムとの関連も強く意識した。例えば「図書館セミナー」と関連づけ、音楽科の資料室の使い方や蔵書の説明も行い、自身の興味関心のある分野を探す一助とした。また「研究と著作権」の内容は引用の示し方と出典の明記について指導する際に繰り返し復習させ、著作権尊重の意識とレポートや論文における出典の示し方を徹底的に指導することに役立った。

②「プレゼンの仕方」

「レポート作成入門」で書いた内容をプレゼンテーションにスライドさせ、レポートの内容をプレゼンテーションとして発表することとした。また音楽科独自の取り組みとして、プレゼンテーションに加えて自身の専門もしくは得意な楽器（声楽を含む）の演奏も行う「演奏付きプレゼンテーション」を公開で実施することにした。1 回生前期の終わりに、自身の興味と関心に基づくプレゼンをし、合わせて演奏も披露することで、学科の上回生や教員への「自己紹介」として位置付けることをねらった。この目的を確認し、プレゼンテーションと演奏には関連がなくても良いこととした。

プレゼンテーションの指導については、基本的には大学が示した共通教材に依拠しつつ、効果的な発表の組み立て方、スライドの作り方、話し方などを解説し、作成過程を共有しながら意見交換をしながら学習を進めた。

（3）学生の反応

受講生はいずれも、高校卒業後最初の大学での学びとして位置づくこの授業に対して非常に前向きに取り組んだ。レポート執筆過程における文章の書き方については高校までの「作文指導」とは異なる部分が多々あるようで、新鮮な受け止め方をしている様子が見られた。自分自身の問題関心を問いのかたちで立て、それに向き合い文献を用いて学び、自分自身でその問いを更新していくという経験は、大学という学びの空間に対して新鮮さを感じている 1 回生の時期だからこそ必要でありまた効果的であると思われる。

試みに 2019 年度受講生のレポートおよびプレゼンテーションのテーマをみると表２のようになる。テーマの設定についてはあまり大きなテーマとならないように助言し、丁寧に文献調査をすることで根拠をもって記述できるものにするよう指導した。そのことが反映されているタイトルが多い。その内容も、多様かつ、個性的で、これらのタイトルを一瞥しただけでも受講生が自身の問題関心に向き合いながら実直に課題に取り組んだことが理解されるところである。

こうした取り組みの結果、受講生の一人一人がどれほどレポートの記述方法やプレゼンテーションの方法を自分のものとして身につけたのかを知ることは容易ではない。しかしながら、この授業における学びの効果が表れたものと思われるエピソードもある。例えば後期の音楽科の授業において、例年に比べて1回生のレポートの形式が「レポートらしく」なっている、すなわち参考文献にもあたり、それをきちんと列挙できている、といった声が学科教員から聞かれた。また 1 回生の全学生が履修する教職課程科目を担当する他学科教員からも、音楽領域の 1 回生のレポートでよく書けているものがあった旨が報告された。こうしたことは、本授業における学びに一定の効果のあったことを示すものであると思われる。

表２．2019 年度 KYOKYO スタートアップセミナー受講生のレポートのタイトル

レポートタイトル
ヴァイオリンの歴史：ストラディバリウスの価値とは
サクソフォンの歴史と曲中での役割：オーケストラとの関係
音響学：コンサートホールでの音の響き方
トロンボーンの変遷：スライドと構造の変化に着目して
シューベルト人物史：歌曲王と詩人たち
音楽が生活に与える影響：クラシック音楽が天才を作る
人が音楽を必要とするわけ：音楽の起源と性質に迫る
音楽療法とは：音楽教育への応用
愛され続ける名曲カノン：カノン進行とカノンロックへの応用
教会音楽の起源：ミサと聖歌の関係性
西洋音楽における楽器と作曲の関係
モーツァルトゆかりの地
吹奏楽における打楽器の歴史
音楽聴取による感動について

（4）2020 年度の取り組み

2020 年度は新型コロナウィルス感染症への対応として、4 月から 5 月にかけてはオンラインでの授業が求められた。そこでレポート課題の前に、まずはブックレビューを書く課題に取り組むこととした。というのも、この期間は大学への通学は原則として実現しておらず、図書館も閉館、図書館の使い方を学ぶ前に取り組むことができるのは、レビューする本 1 冊で学習可能なブックレビューの執筆と考えたからである。このことは、レポート執筆の前段階として文章の書き方の指導に集中することができ、結果的に前年度よりもさらに文章力の育成を強化することにつながったと思われる。

ブックレビューの対象は音楽、音楽教育、教育に関係する新書とした。学生の選んだ新書の一覧が表３である。音楽関係が 3 冊、音楽教育関係が 2 冊、教育関係が 3 冊であった。このうち大友良英『学校で教えてくれない音楽』は３名が選択した。音楽教育者をめざす学生にとってはこのタイトルは興味を引くものであったと思われる。いずれもレビュー対象となる本の選定理由を述べたあと、内容を概観し、その内容についての見解を述べるという構成で書くよう指導した。互いのブックレビューを交流するなかで、互いの興味関心を共有し、また自身の視野を広げるきっかけとなったようである。

表３．2020 年度 KYOKYO スタートアップセミナー受講生のブックレビュー選定書

【音楽関係】
片山杜秀『ベートーヴェンを聴けば世界史がわかる』文藝春秋、2018 年
寺内直子『雅楽を聴く－響きの庭への誘い』岩波新書、2011 年。
岡田暁生『音楽の聴き方-聴く型と趣味を語る言葉』中公新書、2009 年。
【音楽教育関係】
山住正己『子どもの歌を語る：唱歌と童謡』岩波新書、1994 年。
大友良英『学校で教えてくれない音楽』岩波新書、2014 年。（３名が選択）
【教育関係】
諸富祥彦『子どもよりも親が怖い』青春出版社、2002 年。
池上彰『なんのために学ぶのか』SB 新書、2020 年。
岩竹美加子「フィンランドの教育はなぜ世界一なのか」新潮新書、2019 年。

6 月以降に対面授業が再開されると全学共通プログラムをこなすことが精一杯であり、その隙間でレポート課題に取り組むこととなった。結果的に「プレゼンの仕方」に取り組む余裕はなく、その内容は後期の「専攻基礎セミナー」に持ち越すこととした。

なお、2020 年度の受講生のレポートタイトルは表４の通りである。この年もまた各自が自身の問題関心を提示しながら意欲的に文献研究に取り組んだ。2 年目であることから昨年度の受講生のレポートタイトルも共有し、より良いテーマ設定の参考としたことから、2020 年度は前年度よりもさらに興味深くまた焦点化されたテーマが示された。2020 年度の学生にとっても自身の関心に基づく文献調査をまとめ、文献の記述を引用しながら論を立てていく経験は初めてのことである。音楽科教員からの報告によれば、新入生との雑談のおりに、推薦入試合格者に対して入学前に課されているレポート課題についての話題に及んだ際、「入学前に書いたものは恥ずかしくて読んでほしくない」と語る受講生がいたという。それは大学における論述の基礎を学んだことによって、高校までの自身の文章の書き方を相対的にとらえる視点を得たことを示しているといえよう。

表４．2020 年度 KYOKYO スタートアップセミナー受講生のレポートのタイトル

レポートタイトル
グレゴリオ聖歌：旋法と記譜法
唱歌教育の歴史：唱歌教育が確立されるまで
J ポップの変遷と課題：1998 年からの崩壊
ポピュラー音楽業界の今までと現在、これから：人々が求める音楽の形
身体と心で演奏すること:『アレクサンダーテクニーク』に注目して
音のない音楽：ジョン・ケージ「４分３３秒」が評価され続ける理由
音楽はなぜ心に響くのか：音楽心理学研究における現状と課題
スタジオジブリ音楽とは：久石譲の音楽観
楽器と人間:茂木大輔によるオーケストラ楽器別人間学の考察
沖縄らしい音楽とは：沖縄音階の観点から考える
バレエ音楽：≪白鳥の湖≫の初演について

（文責　樫下達也）

２）専攻基礎セミナー（音楽）の内容

（１）2019 年度授業のねらい

本授業は 2019 年度から開始された全学共通授業であり、基本的には各学科単位で１回生を対象として後期に授業が行われる。音楽科は水曜日の１限と２限を使って行われ、実地教育科目「公立学校等訪問」と抱き合わせで実施される。本授業は前期の KYOKYO スタートアップセミナーとは異なり、学科ごとに授業概要、到達目標、授業内容などを設定する。まずは音楽科のシラバスの「授業の概要」および「授業の到達目標」を確認する。

「授業の概要」

中等音楽科教員、もしくは小学校における音楽科運営の中心を担う教員に必要な音楽と音楽教育の知識・技能の基礎を経験的に身につけることをめざし、本学科教員が各専門の基礎的な内容についての授業をオムニバス形式で担当する。また各回のレポート課題に取り組むことで中等および初等教員に求められる最低限の文章表現力および意見表現の能力を身につけることも合わせてめざす。

「授業の到達目標」

・音楽と音楽教育についての基礎的な知識と技能を身につける。
・音楽と音楽教育についての文献を読み、自分の考えたことを文章としてまとめる力を身につける。

本授業で音楽科が重視したのは、各教員の専門に関する基礎的な内容を、経験できるようにすることであった。したがって全教員が参加するオムニバスの形式で授業を行うこととした。実践力をもつ中等音楽科教員、あるいは小学校における音楽科運営の中心を担う教員を育成しようとするとき、1 回生のうちに、各教員の専門について知ることは重要である。例えば 2 回生以降の各学年で行われる教科教育法の授業や実地教育系科目において、自分たちの専門領域である音楽そのものの理解が求められる場面があったとき、その知識について誰に指導を求めれば良いかをあらかじめ知っていることが大切だからである。また 4 回生における卒業研究において、誰の指導のもとでどんな研究に取り組むのかを 1 回生の頃から意識することは有意義であると考えられる。

授業の展開は表５の通りである。網掛けになっているセルの授業は抱き合わせ科目「公立学校等訪問」であり、それ以外の全ての水曜１・２限を専攻基礎セミナーに当てた。

表５．2019 年度専攻基礎セミナー（音楽）授業内容

月	日	回	１限	２限
10月	２日	1	公立学校等訪問オリエンテーション	基礎セミ・「常識を疑う」ということ－音はいつ音楽になるのか（樫下・増田）
	９日	2	公立学校等訪問①事前指導	基礎セミ・「音楽をつくる」ということ－創造的音楽学習の演習（樫下・増田）
	16 日	3	公立学校等訪問①（下京雅小学校：増田）	
	23 日	4	基礎セミ・「音楽を知る」ということ－音楽の多様性と種類（田中）	公立学校等訪問①事後指導
	30 日	5	基礎セミ・「音楽を知る」ということ－日本音楽の基礎（田中）	公立学校等訪問②事前指導
11月	13 日	6	公立学校等訪問②（四条中学校：山口）	
	20 日	7	公立学校等訪問②事後指導	基礎セミ・教育と音楽の交点－伝統音楽の教育（清村）
	27 日	8	基礎セミ・教育と音楽の交点－子どもの歌の歴史（樫下）	基礎セミ・「歌う」ということ－文部省唱歌と合唱①（田邉）
12月	４日	9	公立学校等訪問③事前指導	基礎セミ・「歌う」ということ－文部省唱歌と合唱②（田邉）
	11 日	10	公立学校等訪問③（宇治支援学校：田邉）	
	18 日	11	公立学校等訪問③事後指導	基礎セミ・「歌う」ということ－文部省唱歌と合唱③（田邉）
１月	８日	12	基礎セミ・動きと音楽の創作：プラスティックアニメ①（樫下・増田）	基礎セミ・「楽譜を読む」ということ－演奏解釈の基礎（山口）
	15 日	13	基礎セミ・動きと音楽の創作：プラスティックアニメ②（樫下・増田）	基礎セミ・「歴史を知る」ということ－西洋音楽史概論（古典派まで）（小笠原）
	22 日	14	基礎セミ・動きと音楽の創作：プラスティックアニメ③（樫下・増田）	基礎セミ・「歴史を知る」ということ－西洋音楽史概論（現代まで）（小笠原）
	29 日	15	基礎セミ・動きと音楽の創作：プラスティックアニメ④（樫下・増田）	基礎セミ・動きと音楽の創作：プラスティックアニメ⑤（樫下・増田）

（２）2019 年度授業報告および学生の反応

本授業はオムニバスの形式で行った。そこで相互の授業内容を知るため、授業ごとに授業記録を作成した。ここでは授業ごとに項目を立て、各教員の記録をもって授業報告とする。

①「常識を疑う」ということ：音はいつ音楽になるのか（樫下・増田）

初回授業のねらいは「音楽」ついての思い込みを疑うことにある。冒頭で「音楽とは何か」について話し合い、「あるまとまりを持つもの（形式)」「声、身体、楽器によるもの（素材)」「メロディ、リズム、ハーモニーを備えるもの」等、おもに西洋音楽を念頭に置いていると思われる意見が出たが、「聴き手がそれを音楽だと意識したもの」という意見も出された。これは今回の授業の主題に重なるものであり、受講生からは参照例としてジョン・ケージ《４分 33 秒》が挙げられた。この楽曲について簡単に解説したのち、１分間室内の音を聴き、サウンドスケープの導入とした。その後、構内でユニークな音環境が発生する場所を受講生とともに２箇所回り、普段聞き逃している音に耳を澄ませた。次回提出のレポート課題は「マリー・シェーファー」とし、レポート作成については前期の KYOKYO スタートアップ・セミナーで身につけた能力を活用するよう申し添えた。

②「音楽をつくる」ということ：創造的音楽学習の演習（樫下・増田）

第２回の授業のねらいは、1990 年代以降わが国でも広く行われるようになった「創造的音楽学習」に取り組むことによって、「音楽」をつくることを受講生自身が体験し、そのことを通して「音楽」の定義をできる限り広く、柔軟に捉えることができるようにすることにある。

導入では樫下から創造的音楽学習の概要について説明があり、続いてその学習理論の背景にある 20 世紀以降の音楽史の流れについて、音色の探求、即興性の拡大、図形楽譜の導入などの視点で増田より説明がなされた。

活動の一つ目として「音色と奏法の探求」を行った。両教員によるティンパニを用いた即興演奏を鑑賞し、一つの楽器でも様々な奏法の工夫によって様々な音色が得られること、またその音色をつなげることでアンサンブルができることを理解した。受講生自身も小さな民族楽器や打楽器類を中心に様々な楽器で音色づくりを行ない、その後、各自の気に入った音色をサークル状になってリレーすることで、「音を他者から受け取り、次の者につなげてゆく」トレーニングを行なった。

活動の二つ目として「音楽の記録と構成の体験」を行った。探求した音色を色や形で表現する体験を通して、図形楽譜の教育現場への導入について考える機会とした。またグループで音を構成し、音楽をつくる活動を行った。各グループごとにテーマ性や構成の方法に違いが見られた。互いの作品を鑑賞し合うことで、音楽をつくり、演奏し、鑑賞する、という、音楽活動の全ての段階を経験できる創造的音楽学習の利点について各自が理解できたようである。

③「音楽を知る」ということ：音楽の多様性と種類（田中）

日本音楽や世界の音楽という前に、音楽にはどのような種類があるのか。ふだんあまり意識することがないが、グループに分かれて実際に音楽科教科書や学習指導要領から音楽をさす言葉をリストアップした。そして、それらをどのように分けたらよいのかを考えた。「日本音楽史」の受講生が大半であるせいか、まず「日本と日本以外」に分けてから、「器楽・声楽・両方」「独唱・独奏、合唱・合奏、アンサンブル・管弦楽」などの切口によって分けてはどうかという意見が多かった。

④「音楽を知る」ということ：日本音楽の基礎（田中）

前回の議論を受けて、様々な歴史的解説のある名曲アルバム「トルコ行進曲」（モーツァルト作曲）を見てから、そのイメージのもとになったというトルコの軍楽を聞いて、両者の違いと関係を考え、これらの音楽どう説明し分けたらよいのかを考えた。次に音楽の定義を考えた。≪４分 33 秒≫などの観念的・例外的なものでなく、どこかの人間たちが当たり前にやってきた音楽を対象とした場合、音楽の絶対条件を「複数の音を持ち、人間の意識が働き、何らかの組織づけを持つもの」とした。その組織づけを「音高的側面」「時間的側面」、テクスチュアなどその他の側面から言う語があることを確認した。そもそも「音楽」という語は中国語で、「music」はギリシア語由来で、各々の言葉の意味は現在とは全く違うものをさしていることを確認した。

⑤教育と音楽の交点：伝統音楽の教育（清村）

授業のテーマは「わらべうた教育の授業デザイン」とし、次の活動を行なった。

ⅰ．学校教育における伝統音楽

学習指導要領や教科書を通して学校における伝統音楽の扱いを概観した。

ⅱ．わらべうたであそぼう

二人遊び→数人遊び→クラス全体遊び、と人数を増やし、わらべうたで遊ぶ。「おてらのおしょうさん」「十五夜さんのもちつき」「たけのこめだした」「でんこでんこ」「まめがら」「らかんさん」「やまのおっこんさん」など。

ⅲ．わらべうたを使った授業実践

「やまのおっこんさん」を教材とした、附属京都小学校で行われた授業実践のビデオを視聴し、わらべうた遊びがいかにして音楽学習へと発展していくのかを確認した。

ⅳわらべうたの教育的意義

今日の遊びの経験やビデオを振り返り、わらべうたを学校で扱うことの意義について全体で振り返り、最後に個人でシートに記入した。

コミュニケーション力や自己表現力の育成という点に気づけた反面、1回生にとっては教育的見地から物事をとらえる視点をもつことは今後の課題といえる。

⑥教育と音楽の交点：子どもの歌の歴史（樫下）

授業テーマを「子どもの歌／子どもと歌」とし、大きく二つの内容について講じた。

第1部は子どもの歌の歴史と「歌唱共通教材」である。子どもの歌の歴史について、その背景とともに学び、子どもの歌を歴史的視点から分類した。子どもたちの主体的な遊びから生まれたわらべうたと、教材や芸術作品、商品としての歴史的文脈をまといながら大人によって作られた唱歌・童謡・新しい童謡との違いについて解説し、自分たちの知っている子どもの歌を分類した。また歌唱共通教材について解説し、それらを同じように分類すると圧倒的に文部省唱歌が占めていることを確認した。これは近代以降の日本人としてのアイデンティティ形成のために作られた戦前の文部省唱歌の機能を、現在でも教育行政が利用しているとも見ることができることを指摘した。

第2部は子どもの声の発達である。子どもたち一人一人の「歌の歴史」とも言える、子どもの歌声の発達について、0歳児から小学校中学年までの子どもたちの声を聞きながら確認した。そのうえで、小学校における発声指導について、教科書ではどのように系統的に扱われているかを解説し、わらべうたを始め、言葉の延長線上にある子どもたちの生活の歌声から、頭声的な発声へと導くことで、合唱指導に結びついていくことについても言及した。そのうえで、これはあくまでも西洋音楽的な発声の指導であり、同時に日本の音楽や様々な世界の音楽における発声についても体験的に指導する必要性を指摘してまとめとした。

⑦「歌う」ということ：文部省唱歌と合唱①～③（田邉）

全3回の授業である。1回目は授業のテーマを「歌うこと、歌の持つ力」とし、二つの活動を行なった。一つ目は「歌から得られる効果」についてである。歌い方や発声方法については、声楽基礎演習や合唱の授業などですでに実施済みなので今回は省略。今まで歌を歌った時どのような感覚を持ったことがあるかを質問、「ハーモニーの美しさ」「高揚感」「卒業式などの悲しい、寂しい気持ち」などが挙げられ、聴く時は、「自分の状況と歌詞が一致、共感」「鳥肌が立ち、感動、涙した」といずれも歌により心が揺さぶられた経験は一様にあることが分かった。ではどうして歌にそのような力があるのか、「歌詞への共感」＝言葉、「身体から湧き出るもの」＝声、表現という事がキーワードになっていることを確認した。言葉をより効果的に伝える為に節がつき、人間の声で歌うことでより深い表現になることを伝えた。歴史的な観点でグレゴリア聖歌の例なども説明した。

二つ目はパート練習である。３パートに分かれ、《ふるさとの四季》の〈村祭り〉までを各パートに分かれ練習し、最後に全員で合わせて歌った。

2回目の授業は《ふるさとの四季》の後半の、〈もみじ〉〈冬景色〉〈雪〉〈故郷〉の譜読みと、もう一度前半から音の確認のパート練習を行った後、全体で合わせ、細かい音や強弱の確認をしながら、一通り音取りをした。またこの曲の編曲者である源田俊一郎について調べてきたことを発表し、合唱編曲者として多くの作品を書いていることがわかった。《ふるさとの四季》の曲の順番が季節の流れで並べられていること、〈故郷〉が初めと終わりに分けられている意味を確認した。〈故郷〉〈春の小川〉〈おぼろ月夜〉〈鯉のぼり〉について、調べてきたこと、歌詞のわかりにくい部分、自分の言葉で歌詞の内容を説明し、朗読を行い、教科書ではそのどのような写真が使用され、描かれているのかを見比べた。

3回目は《ふるさとの四季》の前半部分、前回行った歌詞の内容等を確認した後、合唱練習に入った。少し細かいフレーズやニュアンスの表現の仕方などを指摘し、後半は〈茶摘み〉〈夏は来ぬ〉〈われは海の子〉〈村祭り〉〈もみじ〉〈冬景色〉〈雪〉の歌詞や内容について担当して調べてきたものを共有した後、それを曲想に活かせるよう、声の音色や響き、ハーモニーのバランス、強弱などに注意しながら、最後まで練習を行った。

⑧「楽譜を読む」ということ：演奏解釈の基礎（山口）

「楽譜の間違え探し」「表現の伝達について　～きらきら星を使って」「ショパンバラード第１番の異稿について」の３つの内容を、それぞれ30分程度行なった。まず、楽譜の間違え探しで、細かな違いに対する注目度を上げた。続いて、アーティキュレーションの違いを聞き手に伝えるために必要な表現法を体験した。最後に、ショパンのバラード１番の冒頭における様々な異稿を提示し、その違いと楽譜選びの大切さを解説した。

⑨「歴史を知る」ということ：西洋音楽史概論（古典派まで）（小笠原）

音楽史の概要を説明し、大まかな時代区分を示したうえで、バロック時代と古典派の主な作曲家と、最

低限聴いておくべき作品を紹介し、時間の許す限りスコアを確認しながらCD音源を聴かせた。

⑩「歴史を知る」ということ：西洋音楽史概論（現代まで）（小笠原）

前回の復習として改めて音楽史の概要に触れた後、ロマン派と近代の主な作曲家と、最低限聴いておくべき作品を紹介し、時間の許す限りスコアを確認しながらCD音源を聴かせた。

⑪音楽と身体の動き：プラスティックアニメの制作①～⑤（樫下・増田）

今回よりプラスティックアニメの制作に取り掛かった。プラスティックアニメが、世界的に有名な音楽教育メソッドであるリトミックにおいて重要な意味を持つ活動であることを講じ、その後、実習に入った。この授業ではダンサーで振付師のきたまり先生をお呼びして、様々な音楽に即興的に身体の動きをつけるワークショップをしていただいた。

プラスティックアニメの課題曲であるドヴォルザーク《交響曲第９番》第３楽章をスコアを見ながら聴き、振付を担当するグループに分かれ、振付を考えた。

全５回をかけて完成させた《交響曲第９番》第３楽章のプラスティックアニメは学科全体で行う年度末成果発表会にて披露した。

（３）2020年度の取り組み

2020年度は基本的には2019年度の授業内容を踏襲しつつ、次の２点について変更した。その一つめは、各教員の担当授業数の見直しである。既述のように、この授業は実地教育科目である「公立学校等訪問」と同じ曜日・時間帯に行うように設定されており、水曜日の１・２限がここに当てられている。「公立学校等訪問」の引率をする教員が専攻基礎セミナーの授業も担当する場合には、二つの授業を合わせてだいたい同じ負担になるように考慮する必要があったのである。2019年度に負担を感じる教員があったことからこの点を配慮した。

二つめに、新型コロナウィルスの影響から、2019年度に実施したプラスティックアニメの取り組みを見送った。プラスティックアニメは室内での取り組みであると同時に運動量が多く、表現の内容によっては学生同士が密になったり接触したりする場面もあることからこのような判断となった。代わりに、前期KYOKYOスタートアップセミナーで行えなかった「プレゼンの仕方」を組み入れた。

表６がこれらのことを考慮した2020年度の授業実施計画である。基本的にはこのスケジュール通りに行った。

2020年度の学生は、前期でブックレビュー、レポート執筆の方法について学び、後期にプレゼンテーションに取り組んだ。前期のレポートとは異なるテーマを選ぶように指示した結果、新たな関心に基づいて課題を設定する者、前期で調べたことをさらに深める方向に課題を設定する者など、おもいおもいの方向で従前の学びを生かしながら文献調査に取り組むことができた。

表７は専攻基礎セミナーにおけるプレゼンのタイトル一覧である。1月後半からは近畿地方に緊急事態宣言が発令されたため、プレゼンの発表は遠隔会議システムzoomを用いて行い、これを録画したものを

各自が映像編集ソフトを用いて編集、音楽科の学生および教員に対して公開した。

またプレゼンテーション以外の授業についても、昨年同様、積極的に議論に取り組むなど、各教員の専門の基礎的な知識について興味をもって吸収していた様子がうかがえた。

表６．2020 年度専攻基礎セミナー（音楽）授業内容

月	日	回	１限	２限
10 月	７日	1	公立学校等訪問オリエンテーション	公立学校等訪問オリエンテーション
	14 日	2	基礎セミ・「音楽をつくる」ということ－音楽づくり W・S（樫下・増田）	
	21 日	3	公立学校等訪問①事前指導（小笠原） 基礎セミ・プレゼン課題提示（樫下）	基礎セミ・音楽教育①オルフ楽器の体験（樫下・増田）
	28 日	4	公立学校等訪問①（下京雅小学校：小笠原）	
11 月	４日	5	公立学校等訪問①事後指導（小笠原）	公立学校等訪問②事前指導（田邉） プレゼン進捗報告会（樫下）
	11 日	6	公立学校等訪問②（御池中学校：田邉）	
	18 日	7	公立学校等訪問②事後指導（田邉）	公立学校等訪問③事前指導（増田 45 分） プレゼン進捗報告会（樫下）
12 月	２日	8	公立学校等訪問③（宇治支援学校：増田）（諸事情により中止）	
	９日	9	基礎セミ・「歴史を知る」ということ－西洋音楽史概論①（小笠原）	基礎セミ・プレゼンの作り方（樫下）
	16 日	10	基礎セミ・「歴史を知る」ということ－西洋音楽史概論②（小笠原）	基礎セミ・「楽譜を読む」ということ－演奏解釈の基礎（山口）
１月	６日	11	基礎セミ・「音楽を知る」ということ－世界の様々な音楽（田中）	基礎セミ・プレゼンの進捗確認（樫下）
	13 日	12	基礎セミ・「音楽を知る」ということ－日本音楽の基礎（田中）	基礎セミ・音楽教育②－日本音楽と教育（清村）
	20 日	13	基礎セミ・音楽教育③－子どもの歌の歴史（樫下）	基礎セミ・「歌うということ」ー歌唱共通教材の基礎（田邉）
	27 日	14	基礎セミ・プレゼン交流会	基礎セミ･プレゼン動画の作成方法について
２月	３日	15		基礎セミ・プレゼン動画の作成

表７．2020 年度専攻基礎セミナー受講生のプレゼンテーションのタイトル

プレゼンテーションのタイトル
アニメーション挿入音楽のテーマ性について
音楽を理科する：鍵盤ハーモニカが鳴る仕組み
クラシックとミュージカルとポップス音楽の発声の違い
ミニマル・ミュージックと音楽教育
アイルランド音楽
谷川俊太郎と声
音楽療法の現状と課題
音楽の終わりか、新時代か：コロナ後の音楽業界の行方は
BTS はなぜ世界を夢中にさせるのか？
イヤホンやヘッドホン使用による難聴
音楽教育と ICT：これから求められる音楽教育の形

（文責　樫下達也。ただし、2019 年度の授業報告については各回の授業者の報告を転記した）

２．演奏実技科目

１）器楽基礎演習

（１）2019 年度授業のねらい

器楽基礎演習では、音楽科授業で扱う楽器の基礎的な演奏能力と知識を身につけることを目的としている。ここで学ぶ内容は、今後の課程で行われる実践的な授業（模擬授業など）において必要なものである。本授業で扱う楽器の範囲は小学校、および中学校の音楽室に備えられていることが想定されるものである。授業で扱う主な学習項目は２つである。

一つは「楽器の奏法」である。器楽の学習において、学習者の深い興味を誘い、かつ学習活動に自発性と積極性をもたらすために教員が目の前で手本を見せることは非常に有効な手段である。授業における教員の模範演奏が学習者にとっての楽器（音楽）との出会いとなり、教科に対する第一印象を形成することがあるため、正しい演奏や音色を紹介できることが求められる。

もう一つは「楽器の知識」である。正しい知識に基づいて楽器を取り扱うことで、安全な学習活動や環境を整えることができる。楽器の取り扱いを間違えると、突き指や骨折、場合によっては命に関わる可能性もあり、リスク管理のためにも重要な学習内容である。

（２）2019 年度授業報告

授業で取り扱った楽器は「教育楽器」「ラテン楽器」の主に２つである。ピアノに関して、様々な説明を行なった。なかでも、蓋の正しい開閉や楽器の移動作業に関しては、安全に関わる重要な内容であるため、特に強調した。他にもリコーダーやトーンチャイムなど合奏を行うことにより、アンサンブルの楽しさや注意点などを身につけながら、その成果発表として附属図書館の中庭において演奏会を実施するなど、学習意欲の向上にも務めた。また、数多くの珍しい楽器に触れる活動で、楽器に対する好奇心を思い起こすことにより、音楽の授業で楽器に出会う子どもたちの気持ちを再認識させることを狙った。

（３）学生の反応

学生対象のアンケートを学期半ばで実施したため、前半内容の感想ではあったが、学習意欲を高く保っている内容がほぼ全てに見られた。また、大学の実施する学期末のアンケートにおいては、ほぼ全項目において高評価を得ている。ただし、大学所蔵の楽器を授業以外で扱うことができない学習環境のため、時間外学習（自学自習）の分量ついては平均を下回る結果となった。

（４）2020 年度の取り組み

2020 年においては、合奏やリコーダーなどの活動によりリスクを避け、楽器の取り扱いについての学習と、実施可能な楽器の演奏技術習得に集中することになった。資料を調べて各自の「楽器の教科書」を

作成する課題を軸として、模範演奏の動画作成などオンラインでの活動を付随的に導入した。その成果物は、学生間で共有できるようにフィードバックを行なった。授業の目的としている内容は実施できたが、人気のある合奏活動が十分に出来なかったため、学生にとって満足できる内容だったかは不明である。

（文責　山口博明）

２）声楽基礎演習

（１）2019 年度授業のねらい

声楽基礎演習は、人間の持つ唯一のオリジナルの楽器「声」を生かし、発声を学ぶ上で大切な声と身体の仕組みを知り、イタリア古典歌曲を中心に基礎的な発声・歌唱法、表現法を学ぶなかで、自然な発声ができるようになるための基礎的な演習である。またこの授業では、多様な歌の世界、日本の伝統音楽の唄の知識や実践も行い、将来児童、生徒の前で自信をもって模唱できるようになることを目指している。この授業で育成したい力は５つある。はじめに「自分の身体や発声の仕組みを知ること」である。普段、声を出すこと、歌を歌うことについて、自分の身体のどの部分が作用しているかを意識している人は少ない。発声の仕組みを理解し、具体的な言葉で説明できるようになることは、より身体を意識した歌声を目指す時や、児童が発声や声について悩んでいる際に、その原因を理解し、一緒に解決していく手段となり得る。また声帯は、顔が一人一人違うように、それぞれが持つオリジナルの大切な楽器であり、その声の魅力と共に、声を使う教員という仕事に対しても、普段から大事に扱うことも意識するよう指導している。

次に「自信をもって歌える（模唱できる）力」である。この授業では呼吸法や発声法、歌う時の姿勢など基礎的な声の出し方を実践し、イタリア古典歌曲を通じて、頭声発声やベルカント発声を学び、最終的には一人ずつ発表する機会を持っている。授業のなかでは、全員で歌う場面、数人で歌う場面、2 人ずつ歌う場面、数小節ずつ一人ずつ歌う場面等を入れ、お互いの歌や自分の歌に注目するようにしている。また、その度にアドヴァイスを受け改善しながら、少しずつ人前で歌う事、表現することに抵抗がなくなることを目指した。これらの能力は、大勢の児童、生徒の前で授業を行う教員としての基礎的な発声にもつながり、初等音楽科教育や中等音楽科教育などでの模擬授業や発表の機会にも活きてくるだろう。

次に「楽譜を読む力」である。本来、声楽曲が作られる手順としては、まずは詩（歌詞）があり、その詩にインスピレーションを受け、作曲家は音楽を付けていく。その音楽を演奏、再現するためには、まずなぜそうなったのかを読み解き、作曲家の思いを読み取ることが重要だと考える。そこでまずは歌詞を心で感じ表現できることが重要となる。言葉をよく理解し、その音色やスピード感、発語方法、感情表現における様々な工夫をし、どのように伝えれば、より効果的に伝わるかをそれぞれで練習し発表する。じっくりと詩の内容を味わったところで、詩を感じながら楽譜を見ずに音楽を聴いてみる。そこで自分が感じた詩のイメージと作曲家の伝えたい表現との差異や同調性を感じると同時に、言葉の反復や強弱の付け方、言葉に対する音の高低、長短、調性、リズムなどの違いを実感する。ここで楽譜を概観すると、

そこには作曲家の記したメッセージが多くあることに気づく。つまり作曲家がこの詩をどのように感じ、どのように音楽として描き、残したかったのか、その思いへの気づきが生まれる。それは今後、楽譜を見る際に、なぜここはこの高さにしたかったのか、この長さにしたかったのか、このリズムを使ったのか、ここの臨時記号は何を意味しているのか、それらのことを歌詞との関連を感じながら表現することにもつながる。これらは、鑑賞や実技系科目での演奏の際にも重要となってくる能力である。

次に「表現する力」である。楽譜から読み取り、感じたものをどのように表現すると、相手に伝わるかを工夫する。そのためには、子音や母音の扱い方や、フレーズの取り方、ブレスの仕方、強弱の変化など、想像力を形にする具体的な方法を自分の身体の使い方と共に探っていく形を取った。これは模擬授業や教育実習などでもメリハリのある伝え方をする方法、この先のオペラ演習や声楽演習にもつながってくる内容である。

次に「様々な歌の世界を知る」ということである。声楽を学ぶ際、初心者にとって学びやすい発声の原理から、西洋のものを題材に取り扱うことが多いが、教員をする上で、世界にはその文化と共に発展してきた様々な歌があることを知っておく必要があり、教科書にも掲載されている諸外国の歌や日本の民謡などをビデオで簡単に紹介している。興味をもった音楽や事柄に関しては、日本音楽、民族音楽概論の授業でさらに深めていくよう指導している。また日本の伝統音楽を現場で指導する機会も増え、教員採用試験においてもその実技を課されることもあり、2018 年度より、実地講師として長唄の先生をお迎えして直接ご指導いただき、実践の授業を行っている。

（２）2019 年度授業報告

声楽基礎演習では、幅広く様々な歌の世界を知り、実践することを目的としている。以下に授業内容を示す。

①オリエンテーション

学校現場で授業の導入などに使える音楽（歌）遊びを紹介（カエルの歌、むすんでひらいて等）その遊びのなかからサイレントシンギング（内的聴覚）やハンドサインの紹介と実践。

②発声の仕組み、呼吸法、発声法

声帯や声が出る仕組みについて、ビデオや写真を見ながら説明。声をコントロールするための肺や横隔膜、共鳴腔の機能等を学び、自らの横隔膜の柔軟さや肺活量を測るための実践を行う。（歩きながら一呼吸で数を数え、より多くの数を目指すことや、紙を用い、共鳴する音の質によって声と息のバランスをチェックする等）これは児童、生徒と共に授業などで実践できる内容でもあり、日々意識して行うと歌うための筋力の向上にもつながる。さらにその紙を用い、呼気の流れ、バランスを意識しながら発声を行う。同時に体ほぐし体操や歌う際の姿勢、力のバランス、呼吸法も確認し、児童、生徒とできる発声方法なども紹介し体験する。コンコーネも数曲取り入れ、歌詞のない楽曲として、発声を意識しながら歌い表現すること、移動ドで歌う練習やハンドサインを用いながらの発声法も実践として取り入れている。

③イタリア古典歌曲

イタリア古典歌曲から学ぶ理由としては、初心者にとって読みやすく、母音が多く響きを意識して発声することができ、旋律や音程も無理なく歌えるためである。またイタリア語を身近に感じる狙いとして、前半の数回は 5 分程度イタリア語講座を行い、イタリアの文化や音楽用語についての話、イタリア語であいさつや自己紹介ができるようにしている。その後、イタリア語の読み方や特徴などを説明し、全員で《Caro mio ben》の歌詞の読み方、意味を確認し、自分の表現としてしっかりとした声で朗読できるようにする。その後、そこにつけられた音楽を聴き、譜読みをしながら、楽譜から作曲家のメッセージや思い、工夫点を見出し、歌詞と関連させながら、どのように表現したいかをディスカッションする。その際、できるだけ履修生から出てくる感性、自主性に配慮しながら指導している。これらは多様な音楽表現や創意工夫して表現する能力の育成を目標としている。その後次へのステップとして 3 曲程度の課題に取り組む。

④日本の伝統音楽

学習指導要領のなかでも、民謡や長唄など我が国の伝統的な音楽を歌唱教材として取り入れるよう示されており、曲種に応じた発声や言葉の特性を理解し、それを生かして歌うことができるよう指導することが必要になってくる。このことは自らが実体験として取り組むことで、説得力のある指導ができることから、2018 年度より邦楽の専門家を実地講師として招き、2 時間、長唄、三味線音楽の歴史、邦楽の楽譜の読み方、発声方法、歌いまわしなどを実践指導していただいている。

⑤日本の歌

実際の教育現場では、日本語の歌を指導することがほとんどであり、日本語の歌詞をよく理解するために歌詞を縦書きに漢字に直して、詩としてとらえ、日本歌曲を歌う際の基礎的な発音、発語の仕方、表現方法を学ぶ。また歌唱共通教材の曲目リストを配布し、自分がすぐに歌える曲が何曲あるのかを認識し、歌唱共通教材のなかから季節の歌、数曲を取り上げ、心から言葉と音楽を味わって歌えるようになることを目指している。この授業の延長として声楽演習Ⅱでは小学校、中学校における歌唱共通教材全曲を取り上げている。

⑥世界の歌、日本の民謡

我が国の伝統音楽や郷土の伝統音楽、および諸外国の様々な音楽の特徴から音楽の多様性を感じ、知ることを目的として取り上げている。教科書に掲載されている諸外国の音楽ジャンルや音楽名を示し、それがどこの国の歌、音楽なのか、また日本各地の民謡についても都道府県名を考え、どれだけ記入できるかクイズ形式の簡単な小テストを行っている。教員として知っておきたい内容として確認し、ビデオでそれらの音楽を視聴しながら、世界には様々な歌唱のスタイルがあり、それぞれの国の文化から生まれた歌の世界があることを確認し、日本音楽・民族音楽概論の授業でより専門的な内容を学ぶための導

入として位置付けている。

⑦演奏発表

最後の授業に演奏発表として、イタリア古典歌曲から 1 曲を選択し、一人ずつ舞台上で歌唱発表をする。その際、歌う曲の詩を朗読してから歌唱へ移る。この発表の前の２～3 時間の授業内で、一人当たり 10 分～15 分程度の公開個人レッスンを行っているが、それぞれの癖や自らの課題を改善すると共に、他の履修生の様子を観察しながら、どのような指導方法、声掛けが効果的かを学ぶ。発表の際、朗読での表現と旋律がついた歌唱表現への関連性（歌唱表現技術）が未熟な学生もいるが、心から詩を感じて表現しようとする姿勢を評価し、それぞれの課題意識をもって今後の声楽演習の授業で歌唱技術の発展へと繋げていくことを目指す。演奏発表の際のピアノ伴奏も履修生同士で行い、息遣いや表現をお互いに感じながらアンサンブルを行う能力は「重奏・伴奏」「鍵盤楽器演習」の授業にも有益であると思われる。また詩の朗読は国語科や大勢の前で自分を表現し、発表する模擬授業などにもつながる能力だろう。人前で歌うことに対して自信をつけると共に、互いの表現力をよく観察し、これからの自分に活かすことを目指している。

（３）学生の反応

2019 年度は音楽領域１回生（１４名）、他領域１回生（２名）、３回生（１名）、４回生（１名）の１８名が履修した。合唱部や吹奏楽部出身などで、声のコントロールをうまくできる履修生が多く、何事にもまじめに取り組む姿勢を感じていた。特に日本の歌では、歌詞を理解し味わって歌うことに対して、新しい発見を見出したという感想や、世界の歌や民謡、歌唱共通教材などについては、いかに自分が無知であったかということに気づいたという履修生もいた。演奏発表に関しては、人前で歌う事が苦手な学生も数人おり、後日、克服したいと個人レッスンを願い出る学生も出てきた。

2019 年度授業アンケートによるとほぼ全体平均を上回っているが、授業時間外の学習に課題が残った。学習時間について「2 時間以上」が１名、「１～2 時間」が５名、「１時間未満」が１２名という回答であり、授業時間外学習を促す課題提示が不十分であることが明らかとなった。授業時間外学習は、声楽曲の課題の譜読みや練習があるが、声楽の練習は声帯に負担をかけることもあり、あまり長時間行うことは推奨しておらず、練習以外での調べ課題などの学習内容を同時に提示していくことが必要である。また 2018 年度の授業アンケート（回答者 16 名）からの向上点として、「意欲的に取り組んだか」に対して、「とても」が 5 名から 13 名に、「授業の満足度」も「満足」が 8 名から 16 名に、「教員になる意欲を高める取り組み」も「とても」が 6 名から 13 名に、「授業は体系的であったか」に対して「とても」が 6 名から 13 名へと増加している。これは 2019 年度から、世界の歌、日本の民謡、歌唱共通教材等についての授業をクイズ形式で小テストを行い、教員を目指すにおいてはまだ学ぶことが多くあると実感したこと、また公開個人レッスンの際に、お互いの歌を聞き、どのように声掛けを行えばよいかなど、現場の想定をしながら、丁寧に学生とディスカッションした結果がこの数値につながった可能性があり、今後もこの点については引き続き行い検証していく。

2018 年度の授業アンケートでは、毎年の課題ではあるが、授業時間外の学習に課題が残った。また全体的に「とても」や「難しい」という答えと「やや」が同じ位の数字になっているか「やや」の方が多い傾向にある。2018 年度は声楽で受験した学生も多く、すでに習熟している履修者にとっては平易な内容と感じた可能性も見受けられる。課題曲を選ぶ際に初心者から中級者程度の段階的なレベルのものを選択するよう心掛けてはいるが、様々なレベルの履修生がいるグループでの基礎演習のため、そのバランスが難しい。度々少人数や個別で歌う場面を作り、課題内容にやや難易度の高いものを提示していく必要がある。また、2018 年度の日本の伝統音楽の実地講師は、和楽器演習（三味線）の指導者でもあり、偶然この学年の 3 分の１の学生が同時期にこの授業を受講していたため、内容が重なってしまった可能性もある。結果的にこれらの学生は、実地講師の主催する発表会に出演するなど、邦楽に関して習熟度を深めた結果にはなったが、今後これらの授業の関連性などにも配慮して依頼するよう検討する。

（４）2020 年度の取り組み

2020 年度は音楽領域 1 回生（11 名）、他領域 3 回生（4 名）、4 回生（3 名）、科目等履修生（1 名）の 19 名が履修した。コロナの影響か例年よりも他領域の上回生が多く履修していた。今回、対面になる前の課題学習としては、４つのレポートを課した。

①「ベルカント発声法」についての調べ学習と考察

②オペラ１演目全幕鑑賞

主に教科書に載っている演目より教員が１１作品を提示し、そのなかから１作品を選び、YouTube や世界のオペラ劇場のサイトから検索、全幕鑑賞し、“演奏”“舞台”“演出”それぞれの面から感想を述べる。

③呼吸法、発声法について

WEB 講義「子どもたちと実践してみたい発声練習とその方法」（～先生を“究める”WEB 講義～より田邉の収録）を視聴し、実践した上で、学校現場で実践してみたい呼吸法、発声法を挙げ、その理由と自分が感じたことを述べる。

④授業の振り返りと音楽の授業のコロナ対策について

最終授業の補講１回分ができなくなったため、レポートで対応。

ⅰ．今年度の授業のなかで印象に残ったこと、これからより深く知りたい、学びたいと感じたことを挙げ、その理由を述べる。

ⅱ．これからの音楽の授業における新型コロナウィルス感染症対策について、各自治体、学校、団体等の対策内容をいくつか調べ、考えを述べる。

６月からは対面の授業になったものの、飛沫を防ぎながら声楽の授業をどのように成り立たせるのか頭を悩ませたが、６月中は様子を見ながら講義やビデオ学習を中心とし、７月から十分な対策を行った上で演習を行う事とした。長唄の実地講師については、ビデオ講義とし、前もって大学で講義、歌い方などの実践を交えて収録し編集したものを学生に見せ、実践した。また発声法や呼吸法などは、音声を伴わないものは音楽演奏室の外で間隔を空けながら実施し、発声する場合は、マスク着用の上、履修生の間を 2 メートル以上の感覚を空け、壁の方に向かって歌ったり向き合わないようにして、軽く歌うようにし、前で発表する際は、発表者とピアノの前に透明パネルを置いて行った。

また今回レポート課題を課したことで、今までできなかった内容や履修生の授業に対する感想、興味の持ち具合を知ることができた。ベルカント発声という言葉を調べ、発声法や発声の仕組みを学んだことで、より自分の身体や声に対する興味を持ち、イタリア歌曲、長唄という新しいジャンルに挑戦したこと、教員になる前にオペラを全幕観る経験をしたという自信にも繋がっていた。対面授業の回数の減少により、取り組むイタリア歌曲の課題曲は通常より少なくなってしまったため、例年よりは物足りなさは残ったが、新型コロナ感染症の対策をしながら、最後には全員が無事に発表でき、安堵している。

2020 年度の授業アンケート結果によると、「授業時間外の学習」に対して「ほとんど（ない)」が２名という回答があり、「授業は難しかったか」に対して「難しい」が５名あった。「授業時間外の学習」については、今回は演習の時間が少なかったことや、練習室での練習の際はマスクを着用する決まりになっており、歌いにくさなども影響しているのではないだろうか。また「難しい」という回答については、レポート課題など例年にはない課題が多かった点、対面での授業でありながらも、感染症対策のため、教員と履修生との間は常に距離感を保たなければいけなかったこと、発声の見本など、マスクを着用した上で指導しづらい、履修生の口元が見えないなど、踏み込んだ指導を行うことが難しく、理解しがたい面があった可能性も要因に挙げられる。

まだ続くであろう新型コロナ感染症対策においての工夫や、声楽の授業の在り方について、今年度の反省や改善点などを今一度よく検証し、今後の授業に活かしていきたい。

（文責　田邉織恵）

３．作曲・音楽理論科目

１）ソルフェージュ

（１）2019 年度授業のねらい

ソルフェージュとは、楽譜から必要な情報を理解、整理し、表現を通じて他者に伝達するための基礎的な演習である。この授業では西洋音楽を端緒とする五線譜というメディアの特性を適切に理解し、旋律、リズム、和音という西洋音楽の３要素を総合的に実習し、教員を目指す上で不可欠な基礎力を養うことを目的としている。

この授業で育成したい力は３つある。はじめに「音楽を理論的に捉える力」である。ソルフェージュで

使用する課題は小節数も少なく、構成を把握しやすいものが多い。そのため、課題を実施するなかで楽曲分析の導入をおこなっている。たとえば聴音の課題で楽節、同型反復、起承転結、使用している音階や旋律動向などについて分析したのち、もう一度課題を聴くことで理論と音楽の実相を関連させる。視唱の課題では伴奏と歌の関係、楽式を確認するなかで、表現をどのように工夫し得るかを体感する。音楽の授業では、教員自身が楽譜とどのように向き合うのかが、授業構成の端緒となる。毎回の授業でさまざまな楽譜を見る際に、この音楽の特徴は何か、楽譜のどのような点に着目すれば良いのか、表現の重点はどこに置かれており、それをあらわすために全体をどのように組み立てれば良いか、という観点から楽譜とともに表現を考察することを習慣づけ、分析と表現を関連させることを目指した。このような能力は実技系科目、中等音楽科教育における教材研究、特定の楽曲を主題とする卒業研究にも活かすことができるだろう。

次に「聴き取る力」である。履修者はソルフェージュのさまざまな領域で習熟度や経験に差が見られるが、とくに顕著なのは聴音である。この授業で初めて聴音に取り組む者もいれば、音楽科を有する高校の授業内で、継続的に取り組んできた者もいる。そのためピアノを用いた旋律（複旋律）聴音、和声聴音を実施する場合にはレベルの設定がひじょうに難しい。このような状況では中庸なレベルを選ばざるを得ないものの、それでもある履修者にとっては難しすぎるものが、ある履修者にとっては簡単すぎるということが起きる。今年度も初回のレベルチェックで同様の傾向が見られたため、今回は鑑賞教材を用いた楽器聴音に力点を置いた。木管楽器、金管楽器、弦楽器、声楽の主旋律の一部を書き取るとともに、習熟している履修者は伴奏部分も任意で書き取ることとした。この内容は鑑賞教材研究の導入を意図しているが、楽器法や記譜法（たとえば各楽器でスラーが意味するものの違いなど）なども包括することができた。ひとつの楽器であっても、音域によって音色の特徴は異なる。聴音を通じて微細な音色の特徴を感じるとともに、「どのような意図でこの楽器の音域が使われているのか」という点についても考察することで、鑑賞教材への分析の導入を図った。

最後は「表す力」である。前述した２つの力は、おもに楽譜や音楽へ接近する作業であるが、そこで得られた発見や実感を人に伝わるように表す、ということも併せて重要である。楽譜通りに正確に実演する、ということはもちろん必要な能力である。しかし、それを最終的な目標にするのではなく、楽譜を持たない聴者に対してその音楽の特徴が伝わる（ひいては、演奏者がその音楽の何を大切にしているのかが伝わる）ためには、「表す力」が求められる。楽譜と実演の間にはさまざまな溝がある。「楽譜ではこう書かれているけれど、このニュアンスを現すためにはむしろこのように演奏した方がよりよく伝わる」というように、「音楽を他者に伝えられる」ことを最終目標として、楽譜の情報を他者へ向けて表現することを意識し、視唱やリズム打ちをおこなった。実演に関する指導は楽譜に書かれた内容を根拠に、つねに明確なねらいを共有し、具体的な方法を提示することで、模擬授業や教育実習での演奏指導を見越したロールモデルのひとつを示すことを目指した。また、正しく楽譜を書くということも「表す力」のひとつである。今日では ICT が活用されているものの、手書きで美しい楽譜を書けることは、授業実践でも有益な能力となり得るだろう。そのため、毎回聴音の解答を添削することで記譜の基礎を再確認しながら、見やすく、わかりやすく楽譜を書く技術を個別に指導した。

（２）2019 年度授業報告

授業の初回ではソルフェージュの既習内容を把握するためのレベルチェックとアンケートを行い、内容を精査した。ソルフェージュの経験は例年に違わず顕著な差が見られたものの、単旋律聴音のみならず、複旋律聴音、和声聴音、楽器聴音を含めるとそれぞれの履修者が初めて経験する内容を組むことができた。聴音については、内容と難易度のバランスを調整しながら、すべての履修者にとって初めての知識や体験が得られるように配慮した。

ソルフェージュではリズム打ち、視唱などさまざまな課題を実施するが、授業の後半では複合的な課題を実演することを目標とした。たとえば「視唱、指揮（右手)、リズム打ち（左手)」を同時に実施する課題である。このような複合的な実演は、授業実践で歌唱の指導をする（主旋律を歌いながら右手で指揮をし、左手で拍やリズムを打つ）場面でも求められる能力だろう。このように音楽科の授業では、ソルフェージュで扱うそれぞれの内容を総合的に体現することが想定される。そのため、リズム打ちや視唱の基礎的な能力の向上とともに、音楽の複層を一人の身体で表せられるようになることを目指した。

（３）学生の反応

2019 年度は音楽領域１回生（14 名)、他領域３回生（４名）の 18 名が履修した。音楽領域では推薦入試で楽典の試験を実施しないため、一般入試で入学した履修者と楽典の能力差がある。今回は楽典が苦手な音楽領域１回生（２名）については、本人たちの希望により授業とは別に時間を設定し、内容の解説と課題提示、添削を毎週おこなった。他領域の３回生については、小学校教科内容論（音楽）で取り扱っていない内容については自習用のプリントを配布し、添削することで、知識の前提を音楽領域一般入試合格者に揃えた。今後は推薦入試合格者の事前課題として、一般入試で実施する楽典内容を包括する課題を提示することも有益であると思われる。また、単元ごとに Google Classroom で達成度テストを実施することで、履修者の習熟度を可視化し、より適切な指導に繋げていくことを予定している。

2019 年度授業アンケートによるとほぼ全体平均を上回っているが、授業時間外の学習に課題が残った。学習時間について「１時間未満」が 15 名、「ほとんど」が１名という回答であり、授業時間外学習を促す課題提示が不十分であることが窺える。授業時間外学習は、楽典課題に加えて種々の課題の譜読みや練習があるが、すでに習熟している履修者にとっては、時間を割かなくても実演できたため、このような結果になったと考えられる。今後の課題提示では、基本的な内容とともにやや難易度の高いものを同時に提示していくことが必要である。

2018 年度のアンケートでは、「教員になる意欲を高める取り組み」に対して「あまり」が２名という結果となった。2019 年度は鑑賞教材をもとに聴音をおこなうなど、授業実践との関連を明確化したことにより「教員になる意欲を高める取り組み」についての回答は「とても」が８名、「やや」が 10 名となり、わずかではあるが改善されつつある。ソルフェージュとは、さまざまな音楽活動の基礎能力を向上させる科目であるため、教材や音楽教育との直接的な関わりが見えにくい。しかし、2019 年度のアンケートでは「意欲的に取り組めたか」について「とても」が 15 名、「やや」が３名と、授業については能動的に

取り組んだという結果が出ている。つまり、「教員になる意欲」と授業に対する「意欲」は場合によっては別であり、学生自身のなかでも関連していないことが読み取れる。積極的に取り組みたくなる授業を実施し、体験や活動に履修者を引き込みながら能力を高めていく、ということには一定の成果が見られたものの、学んだことをどのように教育に活かせるかについては「このように活かしてみたい」と履修者自身が見出し得るよう導くことが肝要である。１回生の場合はとくに「教員になる意欲」という言葉の指し示すものが明確でない可能性が高い。授業内ではまずそれぞれの能力を高めることを目指したが、それは音楽や楽譜に積極的に関わる素地となる。そして「自分が見出した音楽のこのような側面を、人に伝えたい」と思えることが、ひいては「教員になる意欲」と関連するのではないか。このような能力はこの授業のみで完結するものではないため、継続的な積み上げが必要である。音楽理論科目として後続する「作曲・編曲法基礎演習」と併せて、通年でこの項目にどのような変化が見られるのか、引き続き検証していく。

（４）2020 年度の取り組み

新型コロナ感染症対策として、今年度は履修者を２班に分けて 45 分の授業を２度おこなった。これまでの授業では授業時間のおよそ半分を聴音に充てていたが、本年度はオンラインで公開されている聴音自習課題のなかから毎週３題を自宅にて実施し、その解答を Google Classroom に提出することで残り 45 分の授業内容とした。今回の実施では、レベル（初級から上級）を自ら選択できるため、それぞれの習熟度に沿ってすすめられたことが大きな利点として挙げられる。とくにこれまで積極的に関与できなかった習熟度の高い履修者が、さらに聴音の能力を高めることができた。Google Classroom で添削をおこなうなかで、次に取り組む難易度を指示し、それぞれが少し難しいものに毎週挑戦するような状態を維持した。複数の学生において規定数以上の課題に取り組む様子が見られ、個別の習熟度に細やかに対応することが積極的な参加を促すことが明らかになった。解答に書き込まれた履修者からのメッセージでは「できなかったことができるようになることが嬉しい」と、上達を実感し、意欲を高めている様子が見受けられた。

対面の授業では理論の説明、およびリズム打ち課題の練習方法を提示した。提示した宿題は翌週に一人ずつ実演することを習慣化することで、昨年度の課題であった「時間外学習」の改善を試みた。その結果、時間外学習についてのアンケートを見ると「１～２時間」が６名、「１時間未満」が８名となり、前年度の「１時間未満」が 15 名、「ほとんど」が１名という状況が改善された。

近年、教員採用試験前に個別に受ける相談のなかで「音部記号（ハ音記号)」と「移調楽器」への質問が相次いでいることを受け、今年度から楽典の内容に組み込んだ。初年時の前期に基本的な理論を理解することでスコアを読む能力の向上に寄与し、教員採用試験に限らず、教材研究がより深まることも期待できる。

前年度に各教員に実施したヒアリングの内容を受け、今年度は音楽教育の内容を実体験する場としても機能するよう内容を修正した。今年度とくに重視したのはハンドサインの実施である。履修者によれば、同時期に開講している「声楽基礎演習」でも体験しているということだった。音楽教育に関わる重要

な内容は、それぞれの授業で異なる視点から繰り返し体験することによって、理解をより深めることができるだろう。本研究の目的はこのような関連を企図することで、学びの内容と質を保証することである。この授業では、先行研究をもとにハンドサインの概要を伝えるとともに、手の動きと音階における音の機能がどのように関連しているかを確認した。ある能力を持った学生にはひじょうにむずかしい「移動ド唱法」を実践することで、その意義を体験的に考察し、中等音楽科教育でより専門的な内容を学ぶための下地を作ることを目指した。

（文責　増田真結）

２）作曲・編曲法基礎演習

（１）2019 年度授業のねらい

この授業では「作曲」という行為を「ある主題に対して自分が感じたり、考えたりしたことを他者に伝わるようにあらわすこと」と定義し、「音楽づくり」や「創作」に取り組むための基礎を演習形式で身につける。

ソルフェージュでは五線譜で表記できる音楽を対象としたが、この授業では五線譜表記できない「多様な音や音楽と出会う」機会を作ることも念頭に置いている。履修者はおもに西洋音楽に慣れ親しんできたため、「音楽」といえばいわゆる「西洋音楽」を無自覚に前提としていることが多い。しかし、現在の音楽科教育では「生活や社会の中の音」「諸民族の音楽」「我が国や郷土の音楽」など、多様な音と音楽を包括している。この授業では、意識的にそのような内容を取り扱うことで「西洋音楽」を相対化することを目指した。

作曲という行為を通じて「多様な音や音楽と出会うこと」の意義とは、対象に能動的になり得る（あるいは、ならざるを得ない）ことである。みずから音を構成するのだ、という意思を持つことによって注意深く耳をすませた結果、新しい発見をすることができる。さまざまな細部を聴き取ることは音楽活動の基本的な能力である。そのような能力を育成するため、はじめて出会う音や音楽を傾聴することを重視し、内容を設定した。たとえば新しいわらべうたを作曲する回では、日本の音階理論を概説したのちそれぞれの音階の特徴を実際の音楽で聴き比べた。また、パターンを用いた音楽を主題とした際には、ミニマル・ミュージックとともにガムランを参照し、全員がそれぞれ好きな楽器を選び、即興をおこなった。このような内容は中等音楽科教育、日本音楽・民族音楽概論などの授業にも関連していく。

また、ソルフェージュと同様に音楽教育の種々の実践を体験的に学んだ。たとえば創造的音楽学習を念頭に、身近なものを使って音楽を作ってみる。サウンドスケープの実践を通して外界の音に耳を澄ませ、人によって聞いているものが違うこと、多様な音が身の回りにあることを意識する。不要な音を取り外すことができるというオルフ楽器の特性を生かし、限られた音を使用する即興を実施するなどの体験は、中等音楽科教育でのより専門的な学びに繋がるだろう。

（２）2019 年度授業報告

演習では「先入観に気づき、これまでとは違う発想を持つこと」を目標とし、型破りな素材を用いた現代音楽を参照した。たとえば机や紙、身体を「楽器」と考え、限られた素材からできるだけ多くの音を発想する。その中からそれぞれの履修者が価値を見出した音を自分自身で実演し、聴き合う。それらの素材を持ち寄り、グループで小さな作品を作ったあと、同じ素材を使った現代音楽作品を視聴する。このような一連の活動の中で、表現の可能性や発想の独自性という価値、その面白さを実感できるのである。重要なのは、ある発想を持とうとするとき、年齢や経験にかかわらず、作曲家も教師も児童も、同じスタート地点に立てるということである。教師自身ができるだけ多くの発想を持ち、発想することの価値を自ら理解しているからこそ、児童や生徒の発想を喜ぶことができる。この演習では、教員と履修者の間でそのようなやりとりを積み重ねることに努めた。

授業の後半では、教科書に記載されている「音楽づくり」「創作」の内容を概観し、それぞれ興味を持った内容に応じてグループを作り、発表を行った。言葉のリズムに着目した音楽づくりや、詩を音楽的に声で表現する内容などが示され、その課題に発表者以外の全員で取り組むことによって、課題の面白さや難しさについて考察した。教科書の内容をどのように提案すれば能動的な参加を促すことができるのか、ICT 等を使用しながら学生自身が創意工夫することで、今後本格的に開始されていく授業実践の導入とした。

授業の中ではつねに、作ること、聴くこと、表すことを包括的に体験するよう内容を組んだ。それぞれの要素は切り分けられるものではなく、聴く、という行為を通じて円環的になされるものだからである。自分の楽曲の意図が伝わるように表すこと、他者の楽曲を鑑賞する中で、その楽曲の独自性に気付くことを複合的に体験した。

（３）学生の反応

2019 年度は音楽領域１回生（16 名）、他領域１回生（１名）、他領域３回生（４名）の 21 名が履修した。この授業で視聴した多くの音楽は履修者にとって馴染みのないものであり、授業内の対話では「面白い（興味を持つ)」と感じた履修者と、「どのように聴けばいいのかわからない（理解できない)」と困惑する履修者がいることがわかった。聴き方がわからない、という発言からは「正しい聴き方があるのではないか」と考えていることが窺える。未知の対象についての興味と理解には、さまざまな相関が想定できる。たとえば「理解できないが興味がある」「理解できたことによって興味が湧く」「理解はできるが興味がない」「理解ができないので興味がない」などが考えられるだろう。重要な内容については、体系化されたプログラム全体の中で、興味と理解がそれぞれ深まっていくようにカリキュラムを構成する必要性があることを、あらためて実感した。この授業は「多様な音や音楽と出会う」端緒となる位置付けであるゆえに、選曲がひじょうに重要である。体系的な学びの発端として機能するために、カリキュラム・マップを整理した上で今後選曲を見直す必要があるだろう。

演習では履修者が積極的に課題に取り組む様子が見受けられた。発表では同じ課題に取り組む他の履修者の楽曲に高い関心を持ち、どのような創意工夫がなされているのか、活発な意見交換がなされた。ひ

とつの演習内で「創作、表現、鑑賞」のさまざまな立場を体験することによって、作ったからこそわかる面白さや難しさをもとに、自分の意図を伝えるために工夫をしながら表現（実演）すること、鑑賞の中で楽曲の特徴を見出すことなど、それぞれの領域が活発化したことが確認できた。

アンケートによると「テーマ・領域に興味を持ったか」では「とても」が 13 名、「やや」が８名であり、新しい音や音楽に対して肯定的な反応が見られた点で、本授業の目標はほぼ達成されたといえる。「授業は難しかったか」という項目では「難しい」２名、「やや難しい」15 名、「やや易しい」３名、「易しい」１名とばらつきが見られた。やや難しい取り組みを重ねることを目標としているため、課題レベルの設定は概ね達成されているが、併せて Google Classroom などを利用した個別添削をおこなうことによって、それぞれの履修者に適切な指導を行うことができるだろう。次年度以降この点を改善する。「教員になる意欲を高める取り組み」という項目では「とても」６名、「やや」15 名となった。ソルフェージュと同じく、この授業は初年度の必修授業として、次年度以降のさまざまな教科に関連していく基礎的な演習である。模擬授業や教育実習での授業で取り扱われる「音楽づくり」や「創作」を参照することによって、内容を適宜改訂していく。

（４）2020 年度の取り組み

2020 年度は音楽領域１回生（11 名）、他領域１回生（１名）、他領域３回生（１名）、科目等履修生（１名）の 14 名の履修があった。内容は昨年度に準拠しているが、今年度は Google Form を活用し、充実した意見交流を行うことができた。また、前年度の課題であった個別添削を Google Classroom を活用して実施した。コメント機能を用いて履修者からの質問に対応することができたことは、教員にとっても理解度を把握するために有用であり、今後もこの方法を継続することとする。

昨年と異なる内容は、サウンドスケープの発展として作成したサウンド・マップとそれにもとづくサウンド・プログラムの実践である。サウンド・マップとは、大学内を散策して面白い音現象を体験できる場所を記したものであり、履修者はその場所でしか体験できない、音に関するプログラム（サウンド・プログラム）を創出する。それぞれの履修者に「人間が出す音」「自然の音」「機械の音」から１つテーマを割り当て、各々がプログラムを作成した。表８は履修者のアイデアを集約したサウンド・プログラム、図１はサウンド・マップである。サウンド・プログラムに掲載されたアルファベットと、地図上のアルファベットを関連させながら、履修者はそれぞれ自由に各場所をまわり、各プログラムの感想を記入した。

実施後は各プログラムに対する感想と、サウンド・プログラムについてのアンケートを実施した。表９はサウンド・プログラムを体験した履修者の感想である。

以上の内容は「生活や社会の中の音」への関心や学びにつながっていくことを目的に設定したが、表９の内容を見るとその目的は達成されたと思われる。また、この内容は ICT 活用にも適したものであると考えられる。今後は iPad を活用し、録音した音を使って簡単なミュジック・コンクレート[4]作品を制作す

[4] フランスの電気技師および作曲家であるピエール・シェフェール（1910-1995）が創始した現代音楽の１つのジャンル。「具体音楽」と訳され、身近な生活音や機械音などを録音し、加工、再構成することによって作品を制作する点に特徴がある。

るなどの発展も可能であるだろう。現在、必修授業内で ICT と音楽づくりを包括できていない点に課題がある。今後は音楽づくりと ICT の現状を引き続き調査するとともに、この点を授業に組み込めるよう内容を改訂していく。

付記

今年度は緊急事態宣言の発令により、FD 委員会による授業アンケートを実施することができなかった。そのため、今後 Google Form を用いて独自の授業アンケートを実施することとする。

表８．2020 年度作曲・編曲法基礎演習履修者によるサウンド・プログラム

	プログラムの内容
A	足音だけに注目してどんな人か当ててみよう。早足？ゆっくり？どんな靴を履いている？
B	C 棟と情報処理室のあいだの通路には２つの（換気扇）室外機がある。２つの音に違いはある？その音はどれだけ離れたら聞こえなくなるだろう？
C	可愛い鳥の声を聞いてみよう。たくさんの声からお気に入りを探そう。
D	「ドーンじゃんけんほい」をする。足音や手を叩く音を聴く。
E	外にあるベンチに座ってみよう。３分間の間に何人の人が通っただろう。その人から聞こえた音は？足音？話し声？咳払い？
F	広場内で聞く、たてる音ができる音を録音しておき、みんなでお題と同じ音を探そう。
G	何人くらいの人が、どこから歩いて来るだろう？（目を閉じて聞いてみよう）
H	指定した３箇所はどこも周りに木があります。林、森の中でも音にどのような違いがあるでしょうか。
I	電子ピアノ練習室に行こう。電子ピアノを、ヘッドフォンをつけたまま誰かが弾き、何を弾いているかを当ててみよう。
J	体育館の横へ行き、何のスポーツをしているか、何人くらいいるのか当ててみよう。
K	虫の声と一緒に散歩してみよう。鳴き声と一緒に歩いたり、虫の声を真似してみよう。
L	60 秒のあいだに車やバイクは何台通るだろう。（目を閉じて音で数えてみよう）
M	芝の庭の中心から道場に向かって手を叩きながら歩き、音の反響の変化を聞こう。芝の中心（完全な屋外）と射場（半野外）のそれぞれで自然音を聴き比べ、聞こえ方の違いを感じよう。
N	学生課がある建物の入り口の２つの自動ドアの真ん中にたち、左右どちらが開いたのかを音で当ててみよう。

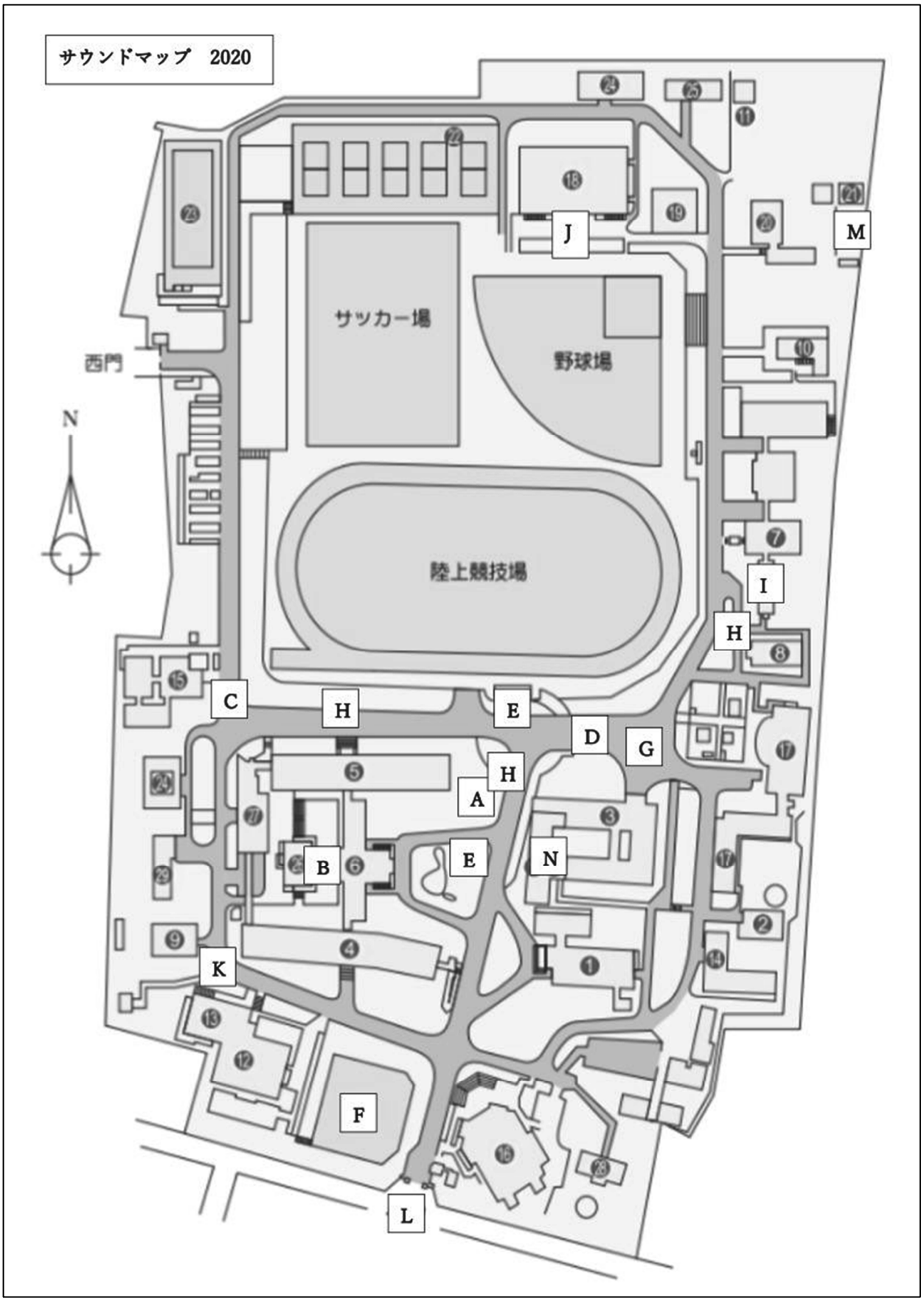


図１．　2020 年度作曲・編曲法基礎演習履修者によるサウンド・マップ

表９．2020 年度作曲・編曲法基礎演習履修者によるサウンド・プログラムの感想

サウンド・スケープもそうだったように、行っているととても耳が研ぎ澄まされていく感覚になった。いつもイヤホンで音楽を聴いたり、テレビを見てばかりいて、自然音をしっかり聞く機会がなかったので、とても自然が身近に感じられる良い機会になった。どこにいても、何かしらの音が聞こえてくるのが面白いと思った。音を探しながら歩くという体験を子どもたちにも体験させたい。
音に注目するだけで、様々な活動ができ、とても楽しかったです。
普段何気なく登校している大学でも、こんなにも音があることがわかりました。どんな場所でも無音の場所は無いし、音があるからこそ世界が豊かになるのではないかと感じました。この授業をきっかけに音を気にかけて生活してみたいです。
普段気にしない音が時間が経てば経つほど聞こえてきたりして、すごく面白かったです。時々こうやって色んな場所に行ってどんな音が聞こえてくるのかやってみたいと思いました。
今回サウンドウォークをしてみて、耳を澄ますことで聞こえてくるような音がまだまだあることに気付いた。帰り道などイヤフォンをしていたり家でも大音量で音楽を聴いたりするのではなく静かに周りの音を注意深く聞くことも大事だなと感じた。注意深く耳をすましてたくさんの種類の音を聞くことが作曲にも関わってくるのだなと感じた。
どのプログラムも私たちの生活の身近な音を使って行うプログラムであった。なかなか耳を澄まして聞くことのない音ばかりであったので良い機会であった。この機会を糧に身近な音をたくさん聞いていきたいと考える。
京教の自然の多さを改めて感じたのだが、ある特定の場所でじっくり音を聞くことがなかったので「この場所はこんな音が鳴ってるんだな」という発見が沢山出来た。 サウンド・ウォークのプログラムを作るのも大変で、音をどのように使えば楽しい企画が出来るのかを考えるのが難しかった。作るために様々な音を探したのも印象深い。
サウンド・ウォークを考えるとき難しいなと思っていましたが、他の人がつくったプログラムを体験してみて、こういった音があるんだとか、こんな場所に音があったんだといった新たな発見をすることができました。 私の身近にはもっとたくさんの音があるので、これからも自分自身でサウンド・ウォークのプログラムをつくってみたり、他の人の体験してもらったりして、音に触れていく機会を増やしたいなと思います。
普通に過ごしている日常でも、耳を澄ませてみると様々な音やリズムがあってとてもおもしろかった。普段からもっと音に敏感になって生活してみようと思った
プログラムを作るにあたってそれぞれが注目する要素が様々に異なっており面白かったです。なかなか足を踏み入れない場所や普段気にしないような場所もあって、新しい発見がありました。
普段、自分がいかにこのような音を聞いてないのか実感した。いつもイヤホンで音楽を聴きながら歩いているが、たまには周りの環境の音を聞きながら歩くのも心がけて安らいでいいなと思った。
どれも日常にある音であったが、意識して聴くことのない音だった。サウンド・ウォークを体験する前に、プリントにあるお題を見ただけで音の予測は自分の中であった。しかし、実際に体験してみると自分の予測と全く違う音が聴こえたときは、なぜそのように聴こえるかということに興味を持った。 今回のプログラムの中で特にＣが、私の予測の正反対で、実際の音を聴いたときは驚きと感動であった。
今回のサウンド・ウォークの取り組みを通じて、京教大の中を散策することで、いろいろな気づきを得ることが出来た。環境による音の違いや、人が無意識のうちに出している音、その他の機械音等さまざまな音に囲まれて普段生活しているのだということを感じることが出来た。実際普段の生活の中で意識の外にあるものを意識下に置くというのは非常に新鮮で、自分自身が楽しんで活動することが出来た。また、このように音に対してのいろいろな人のいろいろなプログラムを体験することで、新しい視点で音と接することが出来たように感じた。

（文責　増田真結）

４．実地教育科目

１）公立学校等訪問

１回生から実地教育科目が始まることは本学のカリキュラムの特徴のひとつである。実地教育委員会による『公立学校等訪問演習ハンドブック』によると、この年次での設定意図として「教育に対する基礎的な認識の深まりと教職への意欲の向上」が挙げられている。この科目はおもに京都府内、および京都市内の公立学校を訪問し、今日の公立学校の教育方針や環境を理解するとともに、授業参観などを通じてこれまでは「教わる側」として経験してきた教育現場を「これから教えていくことを目指す立場」として捉え直すことを目的としている。事後指導では例年「自分が通っていた小学校時代とは授業内容やすすめかた、環境が変わっていた」という感想が多く寄せられる。訪問先の教育の特色、授業構成や発問、児童や生徒のすがたなどの発見に基づいて「教員を目指す立場」から考察がなされており、この授業の設定意図は有効に機能しているといえる。

全体オリエンテーションではこの科目の概要、京都府と京都市の教育の特徴について、教職キャリア高度化センターの教員より説明を受けた。その後の専攻別オリエンテーションでは『公立学校等訪問演習ハンドブック』を参照しながら、訪問の観点と記録、事前ノートなどの様式をダウンロードする方法、準備物、訪問の心得等、全体オリエンテーションでは言及されかった箇所を確認した。とくに、SNS による情報発信の禁止、守秘義務、人権擁護や安全管理はもれなく遵守する必要があるため、重ねて確認した。訪問直前の事前教育では、訪問先の HP など参照しながら特色ある教育への取り組みや、訪問先の基本情報を事前ノートにまとめておき、意見交流をおこなった。その内容をふまえ、訪問時にはどのような点に着目するかを前もって意識することを促し、漫然とした訪問にならないよう準備を進めた。

訪問先選定のねらいは、先進的な教育活動をおこなっている学校(2020 年度御池中学校)や、特定の先生の授業を参観すること（2019 年度四条中学校）を目的とする場合など、年度によってさまざまである。2019 年度に訪問した下京雅小学校は、初回訪問時は移転準備中だったが、2020 年度は新校舎を参観させていただいた。下京雅小学校は楊梅幼稚園と敷地や環境を共有しており、小学校進学がスムースにおこなわれるよう幼小接続の教育研究がおこなわれている。このような今日的な教育課題について、具体的に知ることができる機会となった。

音楽科では例年、公立小学校、公立中学校のほか、京都府立宇治支援学校を毎年訪問している。今日の教育現場では、さまざまな支援を要する児童や生徒に対して、専門的な知見に基づいて対応することが校種問わず求められる傾向にある。この科目で京都府立宇治支援学校へ訪問したことをきっかけに特別支援教育への関心を持ち、特別支援免許の取得を目指すようになった学生もいる。2020 年度は新型コロナウイルスの影響により訪問することができなかったが、学生の免許取得や進路を考える際にも影響を与える重要な訪問先であるため、今後も京都府立宇治支援学校の訪問を希望していきたい。

（文責　増田真結）

Ⅲ．４年間を見通した音楽領域専攻カリキュラムの開発にむけて

１．教員へのヒアリング調査

１）学生の資質・能力に関わる事項

本研究では、教科専門と教科教育の教員の専門性が有機的に関連するカリキュラムの開発に向けて、ヒアリングを実施した。というのも、研究の問題意識の項でも述べたように、これまで個別の教員は自身の専門性を活かしながら学生に身につけたい能力を意識して授業を構成してきたものの、相互の授業内容について知る機会はほとんどなかったからである。このことは、授業において学習内容が重複する事態や、逆にある学習内容についてどこかの授業で取り扱われているものと思い込んで自身の授業内で取り扱わないという事態、また例えばある授業である学習内容について発展的な取り扱いをしようと試みたらその知識に関する基礎的な知識が学生に皆無であったというような事態を引き起こしていた。

そこで 2019 年７月に数日間にわたり、音楽科教員へのヒアリング調査を実施した。調査は主に「学生の能力（知識技能）で不足していると感じること」「他の教員の授業への要望や授業間連携について感じること」の二つについて自由に語ってもらい、これを記録して表に整理するという方法で行なった。ヒアリングは本研究の運用を担う増田、樫下が行った。なお両名の意見については別にミーティングを行うことで上記の２点について出しあった意見を記録した。

こうして示された７名の教員のカリキュラム開発に関わる意見を整理したもののうち、「学生の資質・能力に関わる事項」に関するものが表 10 である。「学生の能力（知識技能）で不足していると感じること」として意見されたものに加え、他授業で取り扱ってほしい内容として語られたもののなかにも学生が身につけるべき資質・能力に関わるものが含まれていたためそれらをまとめて整理した。

資質・能力（知識・技能）で分類し、まず大分類として「a. 一般的思考力」「b. 音楽一般」「c. 音楽学」「d. 楽典」「e. ソルフェージュ」「f. 声楽実技」「g. ピアノ実技」「h. 和楽器実技」「i. 実技一般」「j. ICT の活用」に分類した。当然ながらここに示された資質・能力（知識・技能）は、４年間のカリキュラムにおいてどの授業でどのような資質・能力を身につけさせ、またそれをどの授業で運用し、あるいはそれを深めるのか、といった議論の道筋を示すものであり、カリキュラムマップ開発の基盤を成すものである。

まず「a. 一般的思考力」は主に大学におけるレポート課題や卒業論文の執筆に関わる能力であり、学問的思考に関する分野といえる。これらは大学４年間の学びの全てをした支えする能力である。ヒアリングでこの分野の資質・能力に言及されたのは、４年制大学を卒業した教員に対して社会一般から期待される思考力や文章力を身につけてほしいという教員の願いの表れでもある。この分類の能力を身につけることを期待されるのが、「KYOKYO スタートアップセミナー」や「専攻基礎セミナー」といった初年次教育、また各教員の授業におけるレポート指導、そして卒業論文および卒業関連論文の執筆指導である。

表 10. ヒアリング調査で示された意見（1）：学生の資質・能力に関わる事項

資質・能力の分類（大分類）	資質・能力の分類（小分類）	現状（問題点・課題等）	関連すると思われる授業（身につける授業、運用する授業等）	意見者の専門分野
a. 一般的思考力	自身の興味に基づき、情報を獲得し整理する力	調べる能力が低い。	KYOKYO スタ、基礎セミ、各授業レポート、卒論	音楽教育
a. 一般的思考力	主題を探求する力	一つのことを追求する能力を持ってほしい。	KYOKYO スタ、基礎セミ、各授業レポート、卒論	音楽教育
a. 一般的思考力	批判的考察力	無意識に肯定している前提を批判する力が足りない。何を知らないのかを自覚していない。	KYOKYO スタ、基礎セミ、各授業レポート、卒論	音楽学
b. 音楽一般	音楽の文化的背景への関心、基礎的な知識	音楽の文化的背景に対する興味が薄い。音楽の定義が狭い。高校までの教科書レベルの音楽知識が不足している。	入試、基礎セミ	音楽教育
b. 音楽一般	多様な音楽に関する基礎的な知識	モノフォニーと種々のポリフォニーについて、他の授業で取り扱ってほしい。	作曲編曲法	音楽学
b. 音楽一般	音響学と音律に関する基礎的な知識	音響学、音律についての内容を他の授業で取り扱ってほしい。	要検討	音楽学
c. 音楽学	多様な記譜法に関する知識	五線記譜に限らない記譜法を他の授業で実施してほしい。	作曲編曲法	音楽学
c. 音楽学	西洋音楽史に関する基礎的な知識	教材分析に必要な音楽史の知識不足。および、知識を関連づける力の不足。	西洋音楽史	音楽教育
c. 音楽学	西洋音楽史に関する基礎的な知識	三回生必修では遅い。基本的な内容を確実に定着させてほしい。教科書記載の楽曲を包括していない。	基礎セミ、西洋音楽史	ピアノ、声楽
d. 楽典	楽典の初歩的・基礎的な知識	入学時の楽典の定着度にばらつきがある。推薦入学者に個別授業を実施している。	入試、作曲編曲法？	作曲
d. 楽典	楽曲分析に関する知識と技能	教材分析に必要な楽曲分析（形式、和声）の力が不足している。	作曲編曲法で身につけ、教材研究で運用	音楽教育
d. 楽典	和声に関する基礎的な知識	音階の機能、借用和音、一時的な転調を押さえてほしい	作曲編曲法、演奏実技と教材研究で運用	音楽教育
d. 楽典	音楽の形式に関する基礎的な知識	音楽の形式、構成要素への興味が不足している。分析的に音楽を聴く能力が不足している。	作曲 or 作曲編曲法？	音楽教育、作曲
e. ソルフェージュ	楽譜から音楽全体の構造を読み取る知識と技能	スコア全体を見て視覚化された情報を整理し、読み取る経験と力が不足している。	ソルフェージュ、ピアノ実技、教材研究で運用	ピアノ
e. ソルフェージュ	読譜に関する基礎的な知識と技能	初回の譜読みが甘い。読譜力が弱い。	入試の再検討？	声楽
f. 声楽実技	発声に関する基礎的な知識と技能	声の多様性について、さまざまな種類を取り扱ってほしい。	声楽、民族音楽学、教材研究で運用	音楽学
f. 声楽実技	日本語の歌曲を歌う技能	歌詞の内容を理解せずに日本語の歌を歌っている。	声楽、教材研究で運用	声楽
g. ピアノ実技	ピアノ弾き歌いの技能	小内論音楽−初等音楽科教育　ピアノ初心者も簡易伴奏等でなるべく弾き歌いを。	初等音楽関連カリキュラムの検討	音楽教育
g. ピアノ実技	和声感を伴う実技演奏の能力	実技演奏、和声感に乏しい。	作曲で身につけ、演奏実技、教材研究で運用。	ピアノ
g. ピアノ実技	ピアノ演奏の基礎的な技能	教採実技でアドバンテージにならない学生がいる。	鍵盤楽器演習で身につけ教育実習で運用	ピアノ
h. 和楽器実技	和楽器演奏の基礎的な技能	和楽器演習が必修ではない。卒業時に和楽器も一つ演奏できるようになってほしい。京都ならではの内容もあった方が良いのでは。	和楽器演習の内容検討。教材研究で運用。	音楽教育
i. 実技一般	器楽合奏の基礎的な技能	器楽基礎−合奏研究で連携を図り器楽合奏の基礎的な技能を身につけさせたい	器楽基礎、合奏研究で身につけ教育実習、教材研究で運用。	ピアノ
i. 実技一般	アンサンブル（重奏、重唱）の技能	重唱を取り扱いたい。ピアノと歌と楽器の曲を経験させたい。	身につける授業の検討。教育実習、模擬授業で運用	声楽、ピアノ

i.実技一般	教育用楽器の演奏技能	ピアノ以外の和楽器、リコーダーの演奏能力の不足。ギターや篠笛に触れる機会も必要。	身につける授業の整理。教育実習、模擬授業で運用。	音楽教育
j.ICTの活用	ICT機器の活用能力	楽譜のパソコン浄書をフォローする授業がない。手書きの清書とパソコン清書を身につける	「ミュージックデザイン」で身につける？	ピアノ
j.ICTの活用	ICT機器の活用能力	授業でのICT機器の取り扱いに慣れていない。	各教員の授業で活用を模索、教育法の授業でICT活用の学習方法を模索	音楽教育

「b.音楽一般」「c.音楽学」「d.楽典」「e.ソルフェージュ」は、広く楽理分野と捉えることが可能であり、いわば音楽の知識面の理解である。これは次にみる実技系授業（演奏）の基盤を支えているのみならず、音楽教育学分野の知識理解や授業づくり、教材研究のためにも必要な知識である。したがってヒアリングでは、この分野についての学生の能力不足や授業における取り扱いについての言及が多くなった。

「f.声楽実技」「g.ピアノ実技」「h.和楽器実技」「i.実技一般」は演奏実技分野に関するものである。一般的に中等音楽科教員および小学校における音楽専科教員が音楽科教育の授業を運用する際に求められる演奏技能として声楽、ピアノが挙げられ、これに加えて器楽分野の指導のために和楽器の技能、リコーダー、鍵盤ハーモニカのような教育用楽器に関する知識・技能が必要である。これらの技能は先に見た楽理分野を支えとして成立すると同時に、この演奏実技分野において身につけた実技が音楽教育分野における授業づくりや教材研究、授業実践力を下から支えるものである。

「j.ICTの活用」は、音楽科に限らずこれからの学校現場において必要とされる能力であることは言うまでもない。ただし、音楽科におけるICTの活用は、音楽という「音」によって構成される時間的芸術を扱うという点で特殊であり、その授業での活用方法も独自のものがあると思われる。また表に示された意見にもあるように、楽譜の浄書といった音楽科独自のICTスキルがあることは事実なのである。したがって、学生が他所で身につけてきたICT活用スキルを音楽教育関連授業で適当に活用させるだけでは心もとない。音楽科としてカリキュラムのなかに組みこむことが求められている。

さてこうして作成した表10「学生の資質・能力に関わる事項」は、音楽領域の学生が4年間で身につけるべき「資質・能力」のうちのごく一部でしかない。ここに示されたものは音楽科の教員が課題に感じている、すなわち学生にとくに不足している力であって、身につけるべき力の全てではない。そこで、この表を元にしながら、すでに各授業で身につけることができていると思われる力も書き加え、それらの授業間での関係性（身につけるべき授業と運用する授業の関連等）を整理していくことが必要である。いわばカリキュラムマップ作成のたたき台がこの表であるといえよう。

2）カリキュラム改善に関わる事項

次に「他の教員の授業への要望や授業間連携について感じること」として意見されたことのうち、「カリキュラム改善に関わる事項」を整理したものが表11である。意見は概ね「A. 履修指導」「B. 授業間連携」「C. 授業内容の提案」に分類できる。

まず「A. 履修指導」に関するものとして大きく分けて二つが挙げられている。一つは授業ごとの履修者の偏りである。ここでは「鍵盤楽器Ⅳ」と「和楽器演習」の集中講義の履修者が少ないことが指摘され

ている。これについては学生のニーズに合わせた授業内容を模索していくことが改善案として提案されている。また併せて授業内容をわかりやすく学生に示すことも必要であろう。

表 11. ヒアリング調査で示された意見（2）：カリキュラム改善に関わる事項

小分類	意見	改善案	意見者の専門分野
A. 履修指導	鍵盤楽器Ⅳの履修者が少ない。	要検討	ピアノ
A. 履修指導	和楽器の集中講義履修者が少ない。	どの楽器を取り扱うか内容を見直す。	ピアノ
A. 履修指導	必修と選択のみの区分では履修にばらつきがある。	教員になるために推薦したい授業を準必修と学科で定義付けては？	ピアノ
B. 授業間連携	各必修と他授業との関連が不明。	全体のカリキュラムマップのほか、各必修授業の関連性を図示が有効では。	音楽教育
B. 授業間連携	実地教育科目との関連が不明。	今後実地教育科目必修授業も見据えてカリキュラムを検討。	作曲
B. 授業間連携	それぞれの単元がどの授業に繋がっていくかが不明。	今年度の最後に、それぞれの単元の関連性を図示する。	作曲
B. 授業間連携	鍵盤ハーモニカを取り扱っている授業があるか不明。	必修授業のどこかに組み込む必要がある。	ピアノ
C. 授業の提案	打楽器に特化した授業内容あっても良いのではないか	要検討	声楽
C. 授業の提案	地域を意識した授業がない。企画マネジメント力の不足。	アウトリーチを基礎セミナーの一環として、近隣の教育施設に出張コンサートするなど。	音楽教育
C. 授業の提案	基礎セミナー、講義のみではなく、演習も取り入れた授業が有効ではないか。	複数教員の合同授業を実施する。	音楽学

一方、「必修と選択のみの区分では履修にばらつきがある」との意見も出された。必修科目は 7 授業が指定され、それ以外の選択科目は 42 の授業のなかから自由に選択する。当然ながら履修にはばらつきや偏りが生じてくることになる。幅広く多様な授業内容を提示し、かつそこから自由に選択できることは大学教育ならではの魅力である。しかし一方で、ある程度学科で身につけさせたい資質や能力がある場合には、履修のばらつきは「課題」として捉えられるのである。

ここで重要なのは、この「課題」克服をねらって単線的なカリキュラムを設定してしまうのではなく、モデルプランを示しながら、かつ、各授業においてどのような資質・能力を身につけられるのかを学生に示し、さらにそれらの力がその後に履修するどの授業において活用できるのかを提示することである。そうすることによって、学生は、一人一人が自身の能力と向き合いながら、4 年間の学びの行程全体を視野に入れて履修計画を立てることが可能となるだろう。そのためにも、カリキュラムマップを整理して示すと同時に、中等音楽科教員もしくは小学校において音楽教育の中心となっていけるような教員になるために身につけてほしい資質・能力の一覧（到達度チェック表）が必要なのである。

「B. 授業間連携」についても見ておこう。ここでも「各必修と他授業との関連が不明」であることが指摘されている。また特定の楽器に関する知識・技能がどの授業で取り扱われているのかわからない、といった声も聞かれた。こうした教員の声に応えるためにもやはりカリキュラムマップの整理が欠かせない。また「実地教育科目との関連が不明」との声も聞かれた。これはまさに大学で身につけた様々な能力（知識・技能）がどのような形で現場において生かされていくのか、といった、教員養成大学の課題を意

識した意見である。本研究においても、大学の音楽科内にとどまらず、附属学校や近隣公立学校の教員と連携することを視野に入れることが求められていると言える。

「C. 授業内容の提案」については、現在の授業にはない新たな授業構想の基盤となる意見が見られた。今回のヒアリングで語られたことはごく一部であろう。カリキュラムマップや到達度チェック表の作成過程において学科内で共有し、授業内容改善や新たな授業開設も視野に入れて今後の課題とすることとした。

（文責　樫下達也）

２．到達目標一覧とカリキュラムマップの試作

本研究では、到達度チェック表にもとづき、学生が身につけた能力を自己評価できるようになることを目指している。到達度チェック表の項目を立てるためには、まず各科目で到達目標を設定し、次に科目間の関連を可視化する必要がある。そのため、今回は４年間の学び全体をカリキュラム・マップによって概観し、到達目標一覧によって、内容の関連を明らかにすることを試みた。

カリキュラムマップでは、各年次で目標をたてるとともに、それぞれの項目において卒業までにどのような能力を身につけてほしいかを最終目標として設定した。必修科目と選択科目、一般教養科目ごとに異なる表記を用いており、とくに重要な内容については必修科目の中で取り扱うよう、授業内容の調整を検討する上でも有用な資料となり得るだろう。図２はカリキュラム・マップ（2020 年度暫定版）である。同資料の拡大版を巻末資料として掲載したので細部はそれを参照されたい。

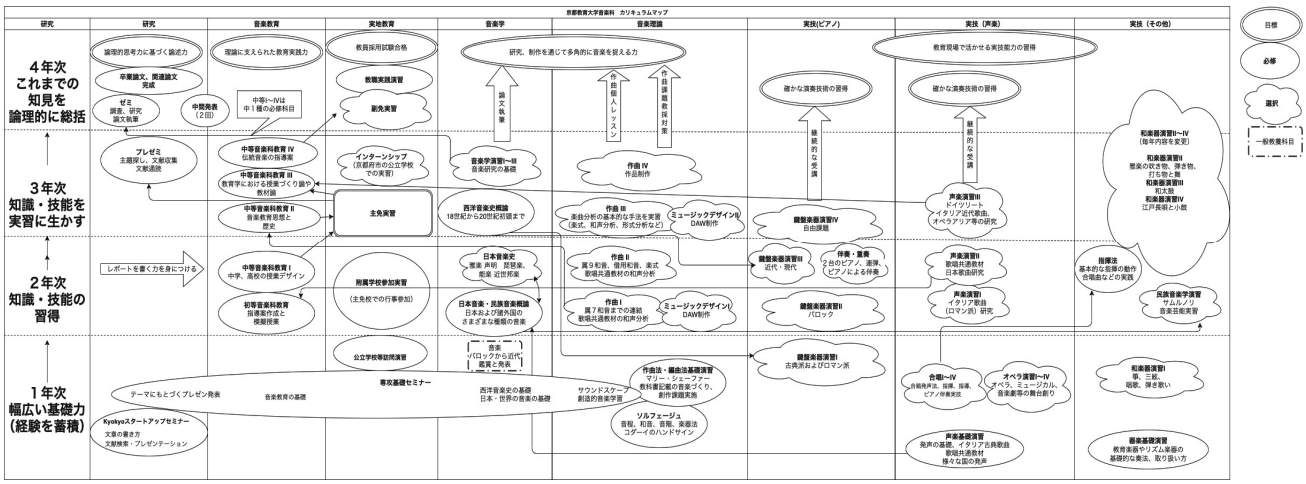


図２．　音楽科カリキュラム・マップ（2020 年度暫定版）〔拡大版は巻末資料参照〕

到達目標一覧では、教科専門科目で獲得した能力が教科教育科目でどのように活用されるか、試みとして音楽理論科目を例に試作した。今後は、すべての科目で内容を精査するとともに、実地教育科目で必要とされる到達目標についても検討のうえ、教科専門科目の内容を見直すことも必要となるだろう。

表 12. 到達目標一覧

| 獲得をめざす能力 | | | 獲得および活用する授業［○=獲得、●=活用（活用が想定される場面）］ | | |

Ⅳ．成果と今後の課題

１．初年次教育の成果と課題

１）成果

1回生必修科目の個別の成果についてはすでに示した通りである。ここでは、それら全体を見通した成果と課題について言及する。

成果については教員に関するものと学生に関するものの二つの視点から述べることができる。すなわち1点目は各教員の専門性に基づく授業内容の把握と共有である。すでに述べたように、2019 年度からは初年次教育科目「KYOKYO スタートアップセミナー」と「専攻基礎セミナー」が開設された。ここでは文章表現の基礎や文献調査の基礎を学ぶ場を設けるとともに、各教員の専門の基礎的内容を授業内容として展開した。この過程において、学生に身につけてほしい大学で学ぶための基礎的な力を把握するとともに、各教員が自身の専門からどのような内容を身につけてほしいのかを調整する必要が出てきたのである。具体的には、「専攻基礎セミナー」におけるオムニバス授業に加え、「器楽基礎演習」「声楽基礎演習」「作曲・編曲法基礎演習」「ソルフェージュ」といった1回生必修科目の内容も合わせて検討し、内容の重複がないように調整した。この調整の場において、教員は互いの専門科目、すなわち 2 回生以降の学生が履修する科目における授業内容についても情報を共有することとなり、その基礎的な内容をすり合わせた。当然ながら、会議の場では互いの授業の関連性についても話題がおよび、その場で 2 回生以降の科目についても内容の調整が図られる結果となった。

このように、1回生の必修科目の内容を「音楽科で学ぶことのできる各教員の専門の基礎的内容」を学ぶものと位置づけ、それを共通理解して調整することにより、結果的には４年間を見通した各教員の授業内容を、一部とはいえすり合わせることができたのである。今後はこのすり合わせ作業を意識的に行いながら、カリキュラムマップや到達度チェック表の作成を具体化していく必要がある。

成果の２点目は学生に関するものである。新設された初年次教育科目は 2020 年度の時点で受講生は２学年（2020 年度の１回生・2 回生）にまたがっている。この２学年の学生は、これまでの学年に比して文章力がついており、他の科目におけるレポート課題に対しても自身の問題関心を明確にした執筆ができていることが音楽科の教員のみならず他学科の教員からも報告されている。これは、レポートの書き方、文献調査の基礎、さらにプレゼンテーションの演習などを通して、自分自身の興味関心を問題意識として掘り下げ、他者に発信することの意義を学ぶことができた結果であると思われる。と同時に、７名の教員が各専門の基礎的内容をオムニバス形式の授業で展開したことによって、音楽や音楽教育に対する様々なアプローチの方法を1回生の時点で知ることができたことの成果であると考えられる。

現在作成中の到達度チェック表を完成させ、これを学生とともに共有することができれば、学生一人ひとりが、自身の身につけた力を主観と客観の両面から捉えることが可能になり、このような初年次教育科目の成果をさらに効果的なものに高めていくことが可能になると思われる。

２）課題

残された課題として３点あげられる。

１点目は到達度チェック表の作成である。初年次教育科目において身につけるべき資質・能力（知識・技能）の関連性をマッピングしたカリキュラムマップを作成し、それぞれの能力を身につけていく過程を可視化し、また授業を履修する過程でそれらの力を身につけたことを実感できるようにしていく必要がある。当初の計画では研究１年次目において、１回生終了時に学生自身が身につけた資質・能力をチェックする到達度チェック表を作成し、実施する予定であった。しかし実際には４年間のカリキュラムマップが完成しなければ１回生終了時のチェック表を作成することは困難であることがわかってきたのである。今後はカリキュラムマップと到達度チェック表の完成をめざす必要がある。

２点目は初年次教育科目で身につけた能力を活用する場面の確保である。すなわち必修、選択にかかわらず、２回生以降の学科授業において１回生で身につけた力を意識しながら活用する場面を意識的に設けることが必要である。当然ここには教育実習のような実地教育科目も含まれてくる。したがって今後は学科内に限らず、附属学校など学生が教育実習を受ける学校との連携も必要になるだろう。

３点目は入試の再検討である。これは研究着手当初は想定していなかった課題である。初年次教育科目の内容とその調整、また教員へのヒアリング調査を進めるなかで、「学生に身につけてほしい力」に話題がおよぶと、「基礎といってもどこから大学で学ぶべき内容なのか」ということが論点として浮き彫りになったのである。これは言い換えれば入学時点で「ここまでは身につけておいてほしい」ということについての議論であり、要するに「入試でどのような力をどの程度まで求めるのか」という問題と言える。とくに音楽領域の専攻生には、ピアノや声楽のごく基礎的な技能に加えて、高校の音楽教科書に掲載されている範囲での楽典的知識、音楽史などの音楽学の知識などは身につけておいてほしいというのが音楽科教員の共通の認識である。ところがこうした能力を、一般入試や推薦入試を含む全ての受験生に対して考査できているかといえば現状ではそのようになってはいない。入試の改革は学科のみの意思で決定できることは少なく、長期的な視野での修正が必要になるだろう。

２．今後の研究計画

今後の計画については、本報告書の冒頭で示した４年間の計画のうち、第３年次と第４年次の計画を遂行することに尽きる。すなわち３年次（2021 年度）は、中学校学習指導要領の全面実施となるため、これを中心課題とする。とくに２回生後期で履修する「中等音楽科教育Ⅰ」と３回生で履修する「中等音楽科教育Ⅱ～Ⅳ」の授業を、教科専門の内容との関連に焦点化しながら実施し、これまでに試作したカリキュラムマップと到達度チェック表を更新する。中等音楽科教育は本研究の遂行、すなわちカリキュラムマップ作成において要となる授業である。それまでに身につけてきた音楽に関する知識や技能、文献調査の力や文章執筆の力はもちろん、教職科目における子ども理解に関する知識、教育史や教育思想といった教育学の知識も総動員して教材研究や音楽科の授業デザイン（授業づくり）の理論を学ぶことになるからである。またこれらの授業における模擬授業や教材開発の実施は教育実習のような実地教育科

目とも関連してくるのである。

第４年次（2022 年度）は、2019 年度入学生が４回生になる、新カリキュラムの「完成年度」である。基本的には１～３年次までの学びが卒業論文指導にどのように活かしうるかを主なテーマとし、同時に「教職実践演習」の授業で学生自身に本プロジェクトで作成したカリキュラムを評価させ、研究全体の成果と課題をまとめる。したがってこの年は各教員のゼミにおける指導の成果を共有することや「教職実践演習」の内容の大幅な再検討などが必要となるだろう。

（文責　樫下達也）

おわりに

樫下達也・増田真結

本報告書の冒頭にも示したように、本研究は「初等教育において音楽科運営の中心となる教員」及び「高い教育実践力を身につけた中等音楽科教員」の育成が可能な学科カリキュラムの再検討を目的としている。これは言い換えれば、本学科を卒業した学生には、是非ともそのような教員として学校現場で活躍してほしいという、音楽科教員の願いが込められている。

研究に着手する端緒はごく些細な、学科会議後の雑談であった。それぞれの教員の授業における学生たちの様子について情報交換するなかで、「このような力が身についていなくて困った」「本当はこういう内容をやりたいのだが前提となる知識が不足している」といったことが出された。いわゆる「授業」のみならず、卒業論文や卒業演奏、卒業制作への取り組みについても、同様の問題があるようであった。教員からみた学生の課題とは大きく二つあった。一つは音楽と教育に関する専門的な、しかし基礎的な知識や技能の習得が十分ではないことであり、また一つは４年制大学を卒業した人物に社会から求められるだけの文章力や論理的思考力が身についていないことである。こうした「雑談」を積み重ねるうちに、「学生たちは音楽科のカリキュラムの中のどこで、何を、どのように学び、それは大学内で、あるいは教育現場や社会でどのように生かされているのか」という大きな「問い」が教員間で共有されるようになった。学生たちの問題とはカリキュラムの問題であり、ひいては教員自身の授業の問題だったのである。

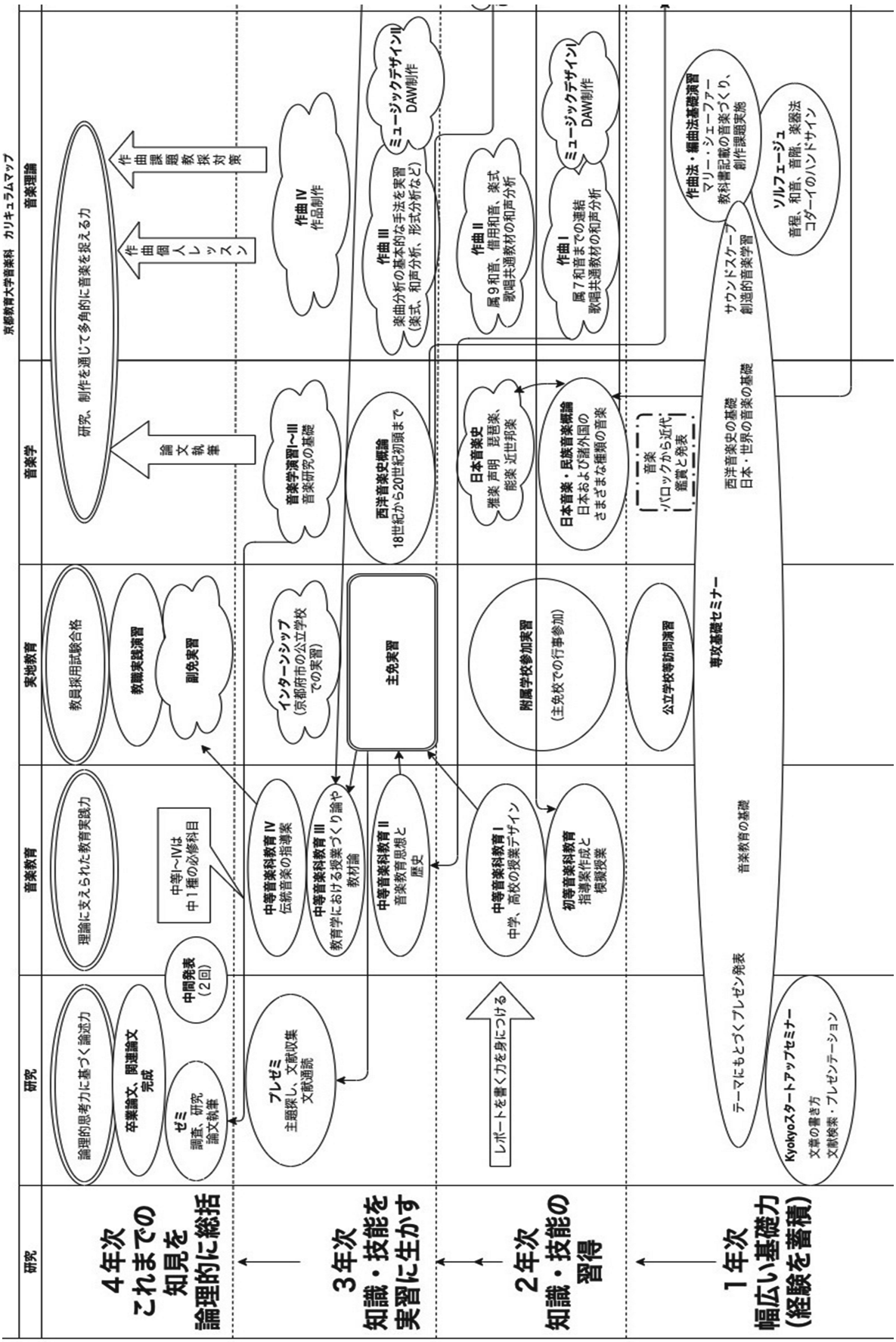
こうした議論と並行して大学のカリキュラムの変更年度が到来し、これを機に学科内のカリキュラムの見直し、すなわち相互の授業内容の共有と連携を進めることを行うこととなった。教員養成大学においては常に問題とされてきた「教科専門」と「教科教育」の授業内容の連携、さらに進めてカリキュラムにおけるそれらの融合をめざすことを研究課題とすることとなった。

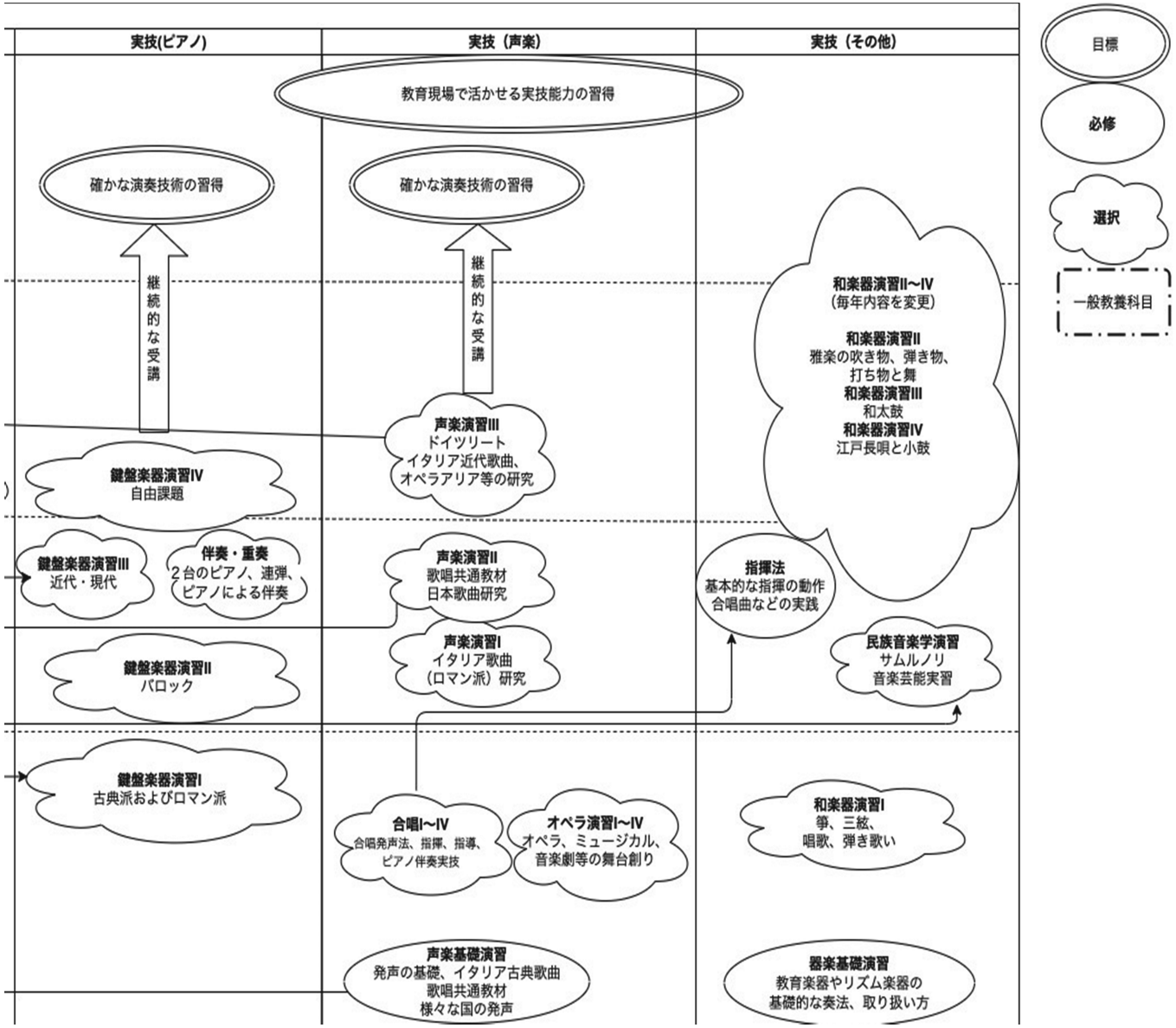
本報告書のなかでも触れたが、本研究を進めるにあたり、学内外の資金を得た。まず、学外のものとして、青山音楽財団による 2019 年度実施「第８回学校等支援事業」の認定を受け（総額 500,000 円）、オルフ楽器一式を購入することができた。資金の援助に心より感謝申し上げたい。また学内の研究経費として「平成 31 年度 教育研究改革・改善プロジェクト経費」（研究代表者　増田真結：総額 626,000 円）の援助を得た。年々大学運営費交付金が削られる現在において、本学のような小さな大学にとっては貴重な研究経費である。報告書内でも言及したように、これらの経費は楽器や ICT 機器その他の備品、謝金として活用し、学科の学生たちの学習内容の充実、そしてカリキュラムの見直しに多大な貢献をした。本学科教員の意欲に対して経費の支出をお認めいただいたことに感謝申し上げたい。

また本学科の学生のために外部講師としてお越しいただいたディートマー・エダー先生と誉田真理先生、そしてきたまり先生も感謝申し上げる。先生方の様々な教えが本学科の学生と教員に与えた示唆と刺激は大変大きなものであった。最後に、本学科のすべての学生たちに感謝を述べたい。本研究の推進にあたって様々な授業の新しい形が模索されているが、その一つ一つの取り組みに対して「教員になりたい」という強い思いをもって積極的に参加してくれている。

本研究は道半ばであり、本報告書は中間報告の位置付けである。残りの２年間で本学科のカリキュラムが学生たちにとってより良い学びの場となるよう、研究をさらに推進していきたい。

巻末資料：【拡大版】音楽科カリキュラム・マップ（2020 年度暫定版）




実技(ピアノ)
実技（声楽）
実技（その他）
教育現場で活かせる実技能力の習得
確かな演奏技術の習得
確かな演奏技術の習得
継続的な受講
継続的な受講
和楽器演習II〜IV
（毎年内容を変更）
和楽器演習II
雅楽の吹き物、弾き物、
打ち物と舞
和楽器演習III
和太鼓
和楽器演習IV
江戸長唄と小鼓
声楽演習III
ドイツリート
イタリア近代歌曲、
オペラアリア等の研究
鍵盤楽器演習IV
自由課題
鍵盤楽器演習III
近代・現代
伴奏・重奏
2台のピアノ、連弾、
ピアノによる伴奏
声楽演習II
歌唱共通教材
日本歌曲研究
指揮法
基本的な指揮の動作
合唱曲などの実践
声楽演習I
イタリア歌曲
（ロマン派）研究
民族音楽学演習
サムルノリ
音楽芸能実習
鍵盤楽器演習II
バロック
鍵盤楽器演習I
古典派およびロマン派
合唱I〜IV
合唱発声法、指揮、指導、
ピアノ伴奏実技
オペラ演習I〜IV
オペラ、ミュージカル、
音楽劇等の舞台創り
和楽器演習I
箏、三絃、
唱歌、弾き歌い
声楽基礎演習
発声の基礎、イタリア古典歌曲
歌唱共通教材
様々な国の発声
器楽基礎演習
教育楽器やリズム楽器の
基礎的な奏法、取り扱い方
目標
必修
選択
一般教養科目

プロジェクト研究組織

増田 真結	講師	研究統括、企画、運営推進、報告書編集・執筆
樫下 達也	准教授	企画、運営推進、報告書編集・執筆
清村 百合子	教授	教科教育科目の内容検討、報告書執筆
山口 博明	教授	教科専門科目の内容検討、報告書執筆
田邉 織恵	准教授	教科専門科目の内容検討、報告書執筆
田中 多佳子	教授	教科専門科目の内容検討
小笠原 真也	教授	教科専門科目の内容検討

（職位名は 2021 年 3 月現在）

教科専門と教科教育を融合した音楽領域専攻のカリキュラム開発：
初年次教育に焦点をあてて

2021 年 3 月 25 日

編集　増田真結　樫下達也

発行　京都教育大学教育学部音楽科
〒612－8522 京都市伏見区深草藤森町 1 番地
電話　075－644－8297（樫下研究室）

印刷・製本　㈱コームラ